



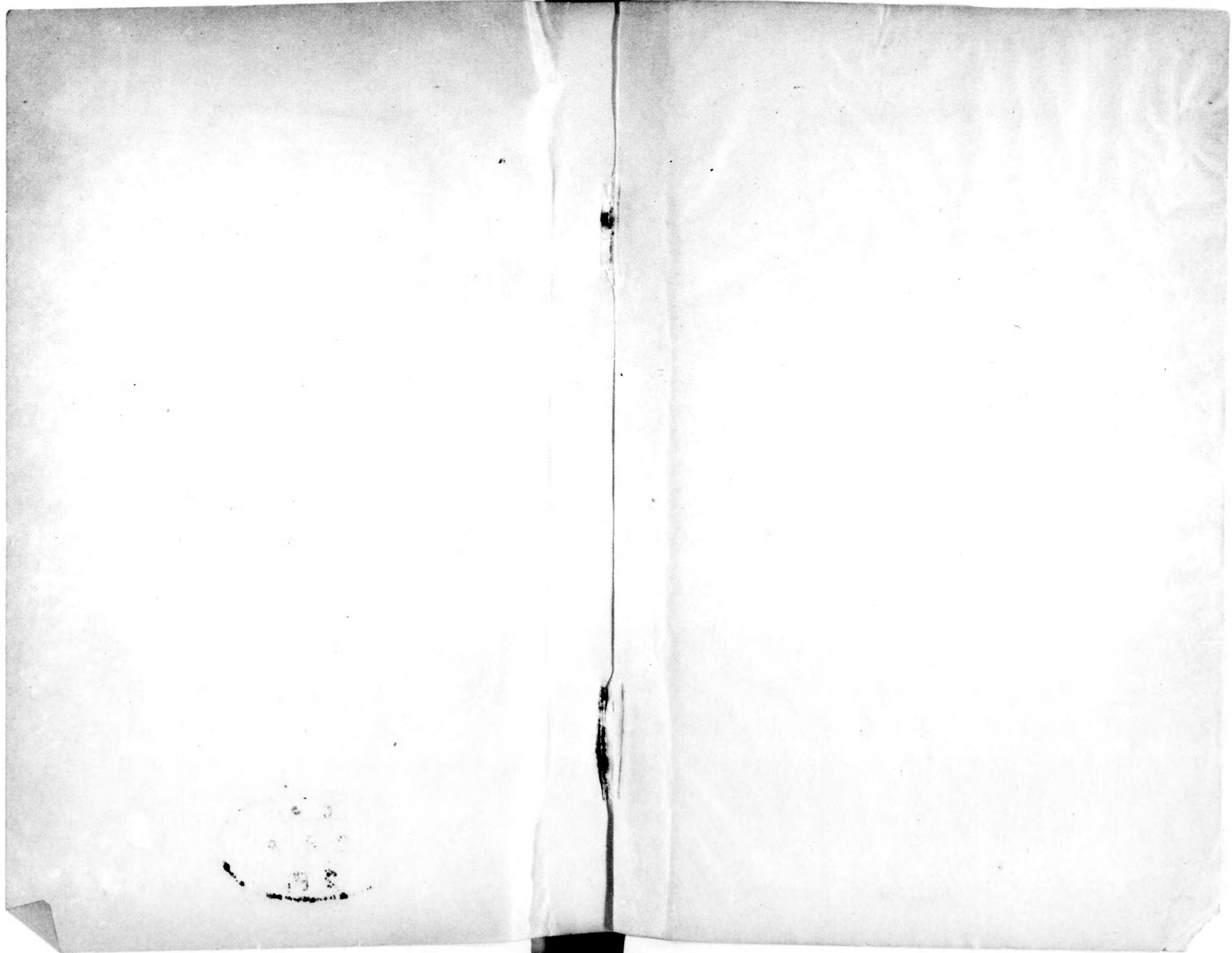
始



天
萍
橋
口



特



13

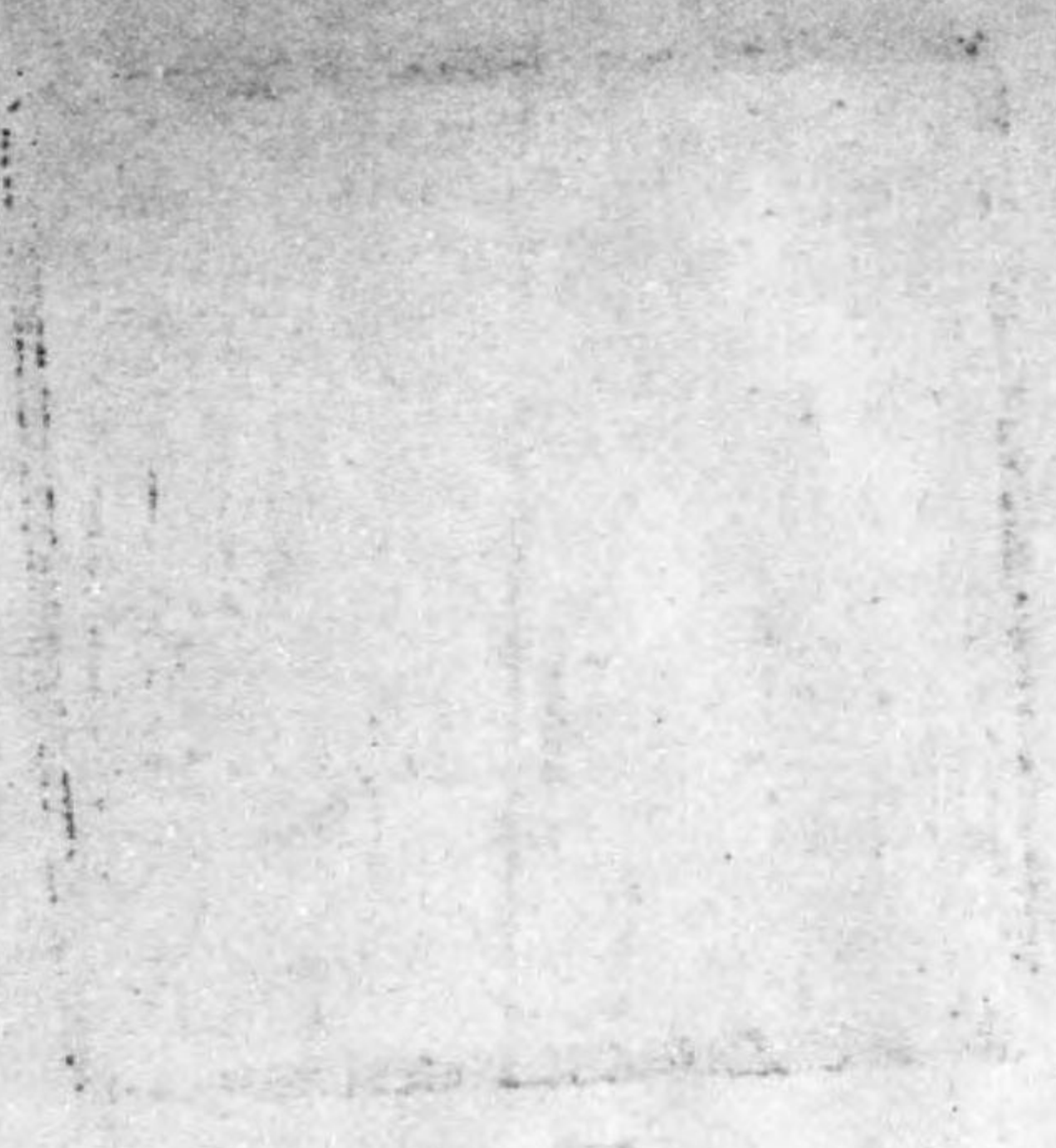
特106
483

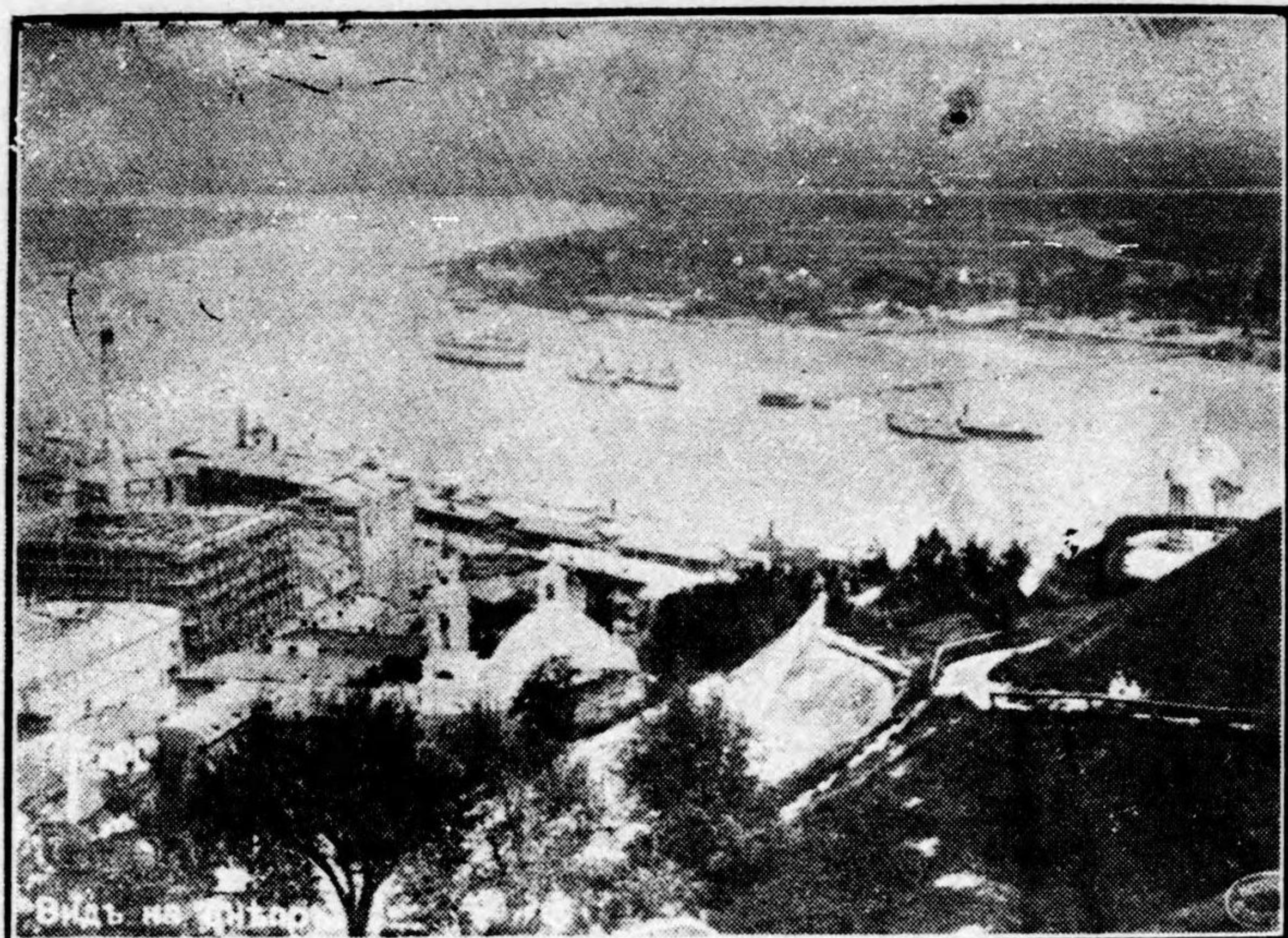


月

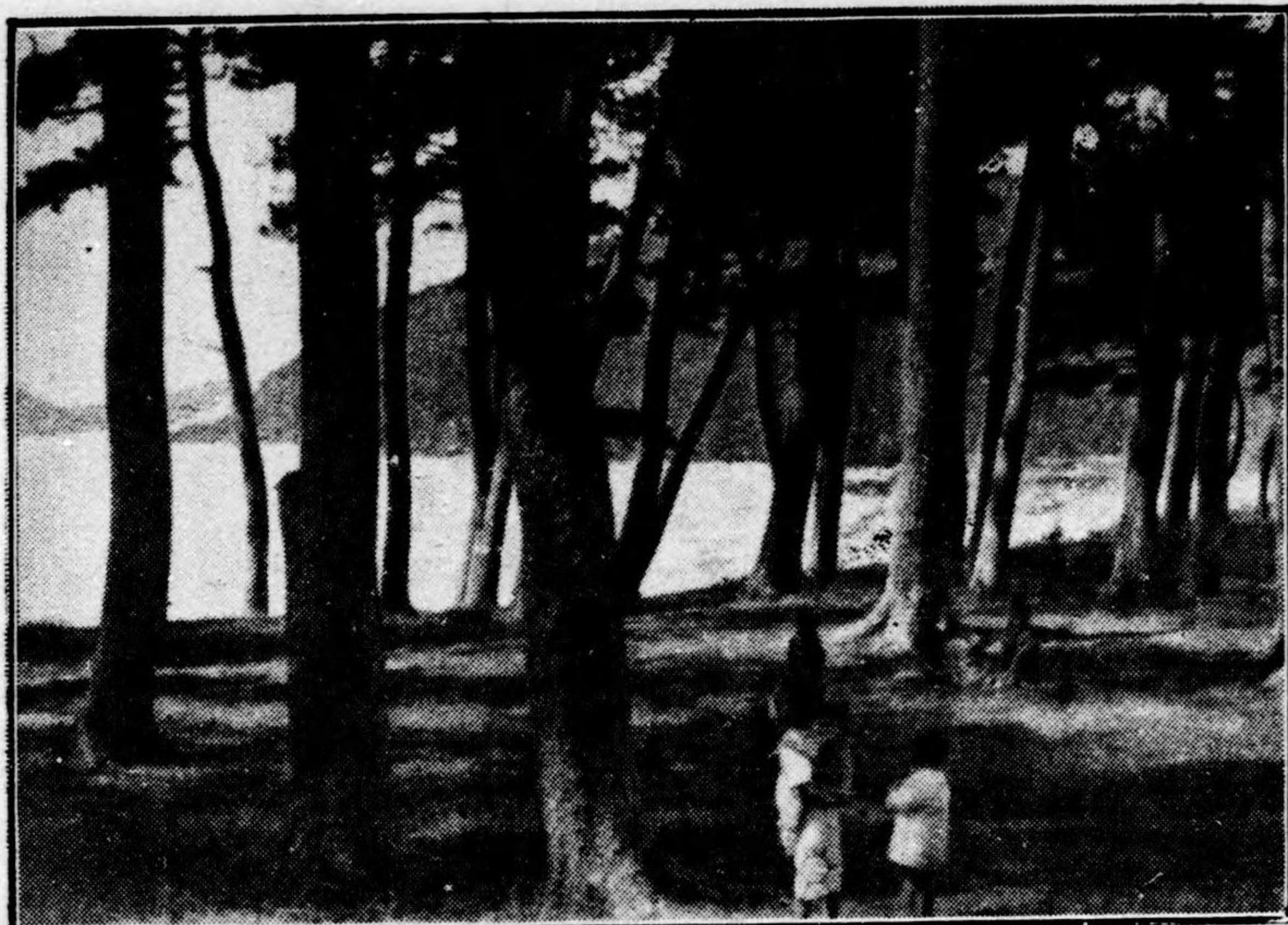
一

日





ダるな名有はるえ々洋方前てしに市フエキ國露圖上
景全の館物博育教市全は圖下、りなれ流のプーユニ



著者の郷里串木野村野元瀧の風景にして青松茂り白砂
千里、海波漫々遙かに西の方支那海に連なり雄大壯美
の風光世に比なし

砂山に登れば青き海の見ゆ
大夏の日ゆる瀨なきかな



史女葉藍下央中。水淡下左、雲紫上左。草昏下右、村曉上右

誕生日の喜び

小川 蘆葉

私は著者と未だ御面接しない頃に、鹿新紙上に現はれた色々なお作を拜見して居ました。そして兼て著者が交際上手の方で行きすがりの旅人でも、海を隔てた遠い異國の人にも一度言葉を交へた人達には、親情を湛へて永く水魚の交りを續けられる方であるといふ贈を聞いて居りましたから、作品のうちでも殊に主観的のものには注意を拂つて讀みました。そして詩趣が泉の如く湧きいづる南國の空に相應しい若き詩人の情緒が滴るばかり作の上に現れて居る事を感トしました。

今度著者が御自身の誕生日を記念として作品集を公にされたに就いて、私は先づ誕生日の喜びを胸に描きました、人の生の上に最も意味の深い誕生日はすべての人にとつても唯一の尊い日でありませう、誕生と云ふ芽生からすくくと伸び上つて幾春秋を過した大木は、枝も葉も出来る丈に擴げて得意の光りを梢の上に輝かせるのでありませう、ろういふ時にも可憐な双葉のいとけなき日を偲び自己の生命の上に一層の向上を促し希望の曙光に向つて進んでゆく事は何時になつても心がけたい理想であります。

私の誕生日は三月の廿九日でした、櫻も桃も花は奇麗な色彩を酔ふやうな春の光りに漂はせて居りましたでせう、著者の御誕生日も同

ト春風の流るゝ四月一日と伺ひました。無限の宇宙間に呱呱の聲をあげた其日ころ一生に忘れ得ぬ記念日でありませう

誕生日を記念としての作品集——何と云ふ美しいお企てでありませう、私はろれ丈に伺つた丈けでも讚美の言葉を心から申しあげたいのでござります。

——五月五日——

新緑の丘の家にて

弱ければ弱ければわれかく迄にあきらめも得ですゝり泣くぞも

花びらの落ちてあるさゝ淋しけれ人の世のことおもはゆるかな

しのび泣き我が頬つたひて流れゆくなみだの心知る人ぞなし

すくくど生ひ立ちし子のひとりなればはしみとくわれをめでけり

○
小川 蘆葉

天萍は危険人物か

牧 曉村

『橋口天萍といふ男は危険人物だ』とさる新聞記者が言つたさうである。どういふ意味で危険人物だといつたのであるか、アナキズムな考へを有つて居るといふのか、極端なソシアリスト、またはテロリストとでも云ふのか、或は基督を賣つたユダのやうな背信な忘恩な所爲もなし兼ねまどき男といふのか、ろんな西洋かぶれた意味でなく極めて神経質で怒りばくて、かつとになると相手の誰彼を問はず拳骨でも爆裂弾でも叩きつけるといふのか、ろんなことを仕兼ねまどき風な男と

いふのか、兎に角さう批評した人があるといふことを私が天萍を知り初める頃誰からか聞かされ頗る興味を感得て天萍に特別な注意を以て對するやうになつた。

申すまでもなく、苟もわが天萍に一度接見したものは彼がたゞ者でない男といふ事は直ぐに察せられるであらう。角ばつた顔、赭色を帯んだ頭髪、秀でた額、注意深さうな眼、疝癩持で聞かなさうな口元、要するに單純な原始的な面構をした日本人の御面相としては甚だ特色あるものである。而して洋服姿のきりつとして西洋人的なところから見ても一種の進んだ革命的な思想を抱いた若者ではないかと思はせる處がある。外見にはさう見へる。危険人物ださうだといふことを

聞いて居て而して天萍を見るならば成程と確に點頭せる處がある。

『馬には乗つて見ろ、人には添ふて見ろ』といふ諺がある。外見だけで人を知らうとするど得て間違ひ易い。又添ふて見ると言つても時々出遇ふか話をするか位ではまだ充分に人を知ることが六ヶ敷い所謂添ふて見るで一つ釜の飯を食ひ合ふか、一緒に旅行をするか、寢泊りをするか。さうすれば相手の性質、性僻などよく分るものである。

私が天萍を知つたのは、天萍がまだ九州日々新聞の支局に居る頃であつた。獨乙か何處かの拳闘家が鹿兒島に來た頃のことである試合場であれが九日の橋口といふ男だと教へられ疝癩の強さうな男だと思

つて居た。

其頃私は長田町の射場阪の上りたての川崎といふ家に居た。其家の息子は大阪の仁丹本舗に養子に行つたので我利々々亡者其の間には一時噂に上つた家である。

四十五年の夏だつたと思ふ。ある朝私の家の前の一段低くなつて居る家の庭で、一人の男が裸になつて、棒を打揮つたり、手足を前後左右に動かしたり、頻りに奇抜な運動をやつて居る。外見には狂人とも見へる恰好であるが、私もうんなことは平素やつて居るので面白い奴だ、大に我意を得た奴だと思つてよく見ると、どうも拳闘家柔道家試合の際出遇つた天洋によく似て居る、はてなと思つてよくよく見ると

天洋に違ひない。

二三日経つた夕方、天洋は下から私の家にやつて來た。ろして椽側に寝轉んでさまざまなことを語つた。書生の時分川内川が大に増水して居る時往復泳ぎ渡つた、しかも其が夜であつたとか、風浪の荒い川内川の川尻をボートで乗切つたとか、角力なら今でもどつて見るとかといふやうなことを得意になつて語つた。而して吾輩腸室扶斯で此間死にかけたが今では非常に丈夫だ、腸室扶斯は願ふても一度は煩ふべき病氣などといつた。私も負けたくなく、曾木瀧で十五の折十二月二十八日の日泳ぎ渡らうとして押流されたことなどを語つた。斯様に天洋は散々自慢嘸をしたが、其が厭味がなくていかにも無邪氣な調子

であつた。實に痛快に聞けた。私は面白い奴だ、いや怖ろしい奴だと思つた。

其翌日であつたか、夕刻から天洋と築港の濱に行つて泳いだ。二人で駆つくらごもした。勝負には淡々たるもので執着がないといつた風であつた。

ある時天洋は、「吾輩夢は餘り見ない方であるが、今の寓屋に来てからどういふものか非常に夢を見るやうになつた。しかも血醒い夢で刃物で人を斬るとか斬られるとかいふ類のものだ。考ふるにあの家は十年役の際死骸や武器を投込んだ古池を埋めた跡に建てた家なので、自然ろんな夢を見るのかも知れない」といつて居たが、間もなく何處

かに移轉して了つた。

零時すると九日の支局を退いたといふ噂があつた。程なく私の社に入つて來た。

一緒になつてから話す機會も多くなる、飲みあひもする、戯談もいふ。霧島登山や、櫻島登嶽など其外いろくなこととも一緒に企ててみた。従つて天洋の性質もよく分つて來た。アナキストでもなければ、ソシアリストでもテロリストでもない。疝癢に障つたればとて直ぐ拳骨を飛ばすやうな暗雲なこともしない。いや其點にかけては私よりはまだくすつと危氣のない方である。橋口天洋は矢張り多くの青年のやうに、現實と詩とを一緒にしたやうな理想を愛する若者である。

勝氣な意氣の旺んな好個の青年である。論より証據其作物を讀めばどんな人間か直ぐ解る。

今度天萍は自身の誕生日を紀念する爲め過去の作物を集めて四月一日と題し出版するさうである。思ふに誕生日といふことはそれ自身ろれ程大切な意味のあるものではない。私としては今日の自分を育てた過去に意味があると思ふ。而して我々はなほ日に日に生れてゆくのである。よりよき自分を生まんが爲めに努力して生れ更りゆきつゝあるのである。天萍は更に第二第三と作物を集めて自分の誕生を紀念せねばならぬ。

『四月一日』の爲めに歌を呉れと私に言つた。何か書けともいつた。

思へば私が文筆に志してから十五年になる。十五年といへば大抵なものでも一通りの成效を収めて居る長年月である。私より遅く文筆に志した知人で相當の著述もして世間に認められて居る人がいくらもある。田舎の新聞に燻ぼつてたまゝに書くものも書くものも、牛の寝屁のやうなことはかりしかも未だ一度も著述したことのない虫虻蛄のやうな自己を顧みれば序文などといはれた咄ではない。たゞ同僚の誼みといふ言葉に大きくなつて思ひ浮ぶまゝを書いた。歌は大正二年の夏の作から比較的氣分の出で居ると思はれるものを抜いで送つた。取捨は天萍の自由だ。

○ 牧 曉村

桃よ、桃よ、ナイフの刃尖に鮮かな肉の露はるゝ晝のかなしみ
 水瓜さればうす桃色の熟しきれぬ實にてありけり心さびしむ
 蒸し暑さに眼くらみのするいとしさよ、ホールに入りて冷乳を飲む
 疲るれば子供どもに自働車の玩具はしらせわれもよく遊ぶ
 いくら寝ても寝足たぬ晝寢妻がささし瓜にはつきりさめぬ蟬鳴く

無邪氣な男

郡山春草生

橋口君と知つたのは六年許り前で僕が某新聞社から九日社の支局へ入
 つた時君はもう古参様で納り返つてゐたものであつた、ろして僕を警
 察署の警務課へ連れて行つて紹介してくれた、其の頃君は赤銅縁の眼
 鏡を掛けたイヤに氣取つた様な取り付きの悪い男哉と思つてゐた、し
 かしろれも交際して行く内に色々な冗談や悪口等言ひ合つて仲よくなつ
 てしまつた、随分ムツとする様な皮肉を言ふ男で其の時僕もキツと負
 けぬ氣で皮肉くり返してゐた、何時だつたか君はこんな事を言つた。

君達は女が見て直ぐ惚れるけれど、又直ぐわきられて仕舞ふ性質だ、僕等は直ぐ惚れられぬかわり一度惚れたが最後、容易に離れぬからなアと言つて例の如く皮肉な笑ひをした、僕ムツとせざるを得んや、何とか彼とか言つて口論した事を覚えてゐる。或はさうかと此の頃思つた。夏の頃よく二人は午砲が鳴ると何方からともなく原稿紙の端に行かうか』と書いてやつて二人は知らん顔で何気なく装つては城山へ行つた、ろして七高の上の何やら記念碑の上の茶屋でチャンボを食つた。新緑の樟の芽薫る頃の無雑作な腰掛けに並んで他愛もない事を話しながらチャンボを食つたり茶を飲んだりした、今考へ出してもあの頃が懐しい氣持ちがする。何時だつたか食つて仕舞つてから財布がな

い、どうくチャンボ代十五錢借用候事實証也後日之爲一札如件と手帳の端に書いて、笑ふ茶屋の叔母さんに渡して歸つた事もあつた、ろれど社の下に焼芋屋が頻りに食欲を増進させる様な腸壁を刺戟する様な好い香で焼いてゐるのを大枚五錢を投つて二人頬張つた事も無邪氣な記憶の一つであらう、その後二人は離れくてもう以前の様な無邪氣な生活はなくなつた、橋口君として僕の記憶に残つたものは斯うした無邪氣な事で今でも時々會つては其の頃の小供々々した事を話しかつては笑ひこける。トこんな事を書いて序とやらになるでせうか。だつて僕には此の外書う様な事もないんですから。又ろんな六ツかしい事も書けないんですから。

餘白に一筆(一)

何時だつたか郡山君と朝日通りを並んで歩いてゐた。例に依り相變らず戯談を言合つて居る中何かの拍子に天氣の話になつた

「明日は雨だらう」

と郡山君は一寸空を仰いで斯う呟いた、僕は直ちに

「阿呆だなア……此の天氣に雨が降つて堪るか」

と次ぎ／＼に持前の皮肉や何かを繰出して茶化しにかゝつた、すると郡山君少々氣色ばんで

「ろんなら雨が降つたらどうするか」

と詰めて來た、アイタ、之れは言過ぎたかと感付いたけれども仕方がない

「ろんどさや傘でもさすかなア」

之れには流石の郡山君、グツと行詰つて二の句が出なかつた(天津生)

無遠慮に申上候

天津生の解剖

淡水漁郎

天津兄足下!

何の誰やらん云ふ阿爺さんは、絶叫道破すらく「文は尙ほ人の如し」
 とか、蓋し眞理だと思ふ

私は兄が全「四月一日」なる冊子を剗剗に附するに際し「無遠慮に申上候」と題して私の『天津觀』『天津生の解剖』を説述し以て序言に代へ度い

天萍兄足下

天萍生は妙な男である、私が始めて兄の風貌を仰ぎ其の聲咳に接するを得たのは、既に六年の昔に屬す

あの金髪の褪せた様な、赭色の毛髪、ともすれば縮れ氣味なるを、程よく、角刈態に刈込み、金縁眼鏡光輝燦として其の通つた鼻筋に閃めき、引締つた口元、白皙に近い肌膚、背丈高く、すらりと五尺四寸、見上げ見下す其の瀟洒たる風貌殆んど一分の隙とても無い、中肉で十四貫何匁、全く程が好い、然り眞に身体各部の調和を得て居ると謂つ可しである

初中終、雪白のカラーは洗濯づくめ、代赭色の襟飾に、銀杏葉形の

襟飾針、四季折々の流行に連れては時好の新型背廣、變りチヨツキに色彩の調和も首肯かれ、編上げ靴の運びも一步は一步といと鷹揚に、細身の洋傘軽く小脇にかい込んだ、瀟洒たるスタイル、お年は若し氣品はあり、扱ても果報冥加な男ではある、あゝ、あの青春の血漲る、若やぎし日の誇りと熱とを、永久に喪失せざらんを祈つて止まない

而て天萍生は洋食が大の嗜好で、編輯局に於ける日毎の晝食には、必ず麵包とバターを欠がしたとがない、其他何んにまれ、彼んにまれ、洋式ならでは夜が明けぬらしい、道理で英語をいと流暢に操り、其の金髪と其の風貌を以てして、英人か、米人と偽つて吹聴せば通用せぬ事もあるまいと察せらるゝ位

斯く叙し去り叙し來れば、天萍生は高襟で、氣障で、優柔で、不斷で、女性的で、お坊つちやん育ちの世間知らずの様に聞へるが、仲々以て左様でない、あゝ貴公子的に、優男で、虫も殺すまどく見へて、しかも殺伐な、男性的な、武張つた、運動や競技が頗る非常に好きだから妙だ

殊に相撲、擊劍、野球、端艇、登山、狩獵、何でも御座れで、適くとして可ならざるはなく、何所に出しても第二撰手位は優にやつてのける程の、熟練なる手腕の鮮かさ、冴へ加減、技正に堂奥に入つた格である

人は見掛けに依らぬとは至言なる哉だ、そして、無愛想な様で滑稽

味や諧謔があり、頑固な様で圓轉滑脱、眞に如才が無い、ザツクバランな様で用意周到に、緻密に、水も漏らすまどき劃策ぶり、粗笨な様で精緻に、輕燥な様で眞摯に、執拗な様で恬淡に、脱線した様で常軌に、偏僻な様で中正に、氣六ヶ敷い様で心安く、常に昂然高く居る様で謙抑に、沈黙寡言な様で時に駄洒落、警句口を衝いて出づるなど、曰く何、曰く彼と、天萍生獨特の個性は隨所に片鱗を閃めかす

兎に角、常識の至極圓滿に發達した八面玲瓏、才氣透徹の、話せる男、親しみ易い馴れ易い、興ある面白い男である。非常に情熱的な觸るゝ凡ての物象を燒盡せねば止まぬと言つた風の所もあれば、案外冷靜に、物外に超越した様な所もある、兎に角一寸變つた(善意の)妙な

男である、所謂天洋式である

縣下日置郡串木野は大字下名の産で明治二十年四月一日、あの外洋より寄せては返す鞆鞆たる風濤裡に呱呱の聲を擧げた、當年取つて正に青春二十八才、未だ獨り身の前途有爲の器たるを、特に茲に御紹介な仕る

天洋生の筆致は、敢て絢爛目を奪ふの態は無くとも、理路井然として明快、暢達の格である、殊に興味索然唯だ蠟を囓むが如きの計數的材料を、豊麗なる詞藻を按排點綴する事に依つて、所謂材料を生かして取扱ふなど仲々お手に入つたもの

天洋兄足下！

まだく私は天洋生の諸方面各部に關して絮說すべき多くの材料を有せぬではないが、事聊か機微に觸るゝの虞ある爲め、天機容易に漏さざるの口吻を學んで敢て多くを言ふまい、兄請ふ意を安んせよ呵々

天洋兄足下

最後に私は、私が斗筭の非才、曳白の筆を以てして、兄が「四月一日」の巻頭に題言するの、唯徒らに佛頂塗糞の譏りを免れぬので、一應も二應も御辞退な仕り、御宥恕を切請せしも、兄一流の外交はいとも巧妙にその効を奏し、瞬く間に私を説伏し、私は何時の間やら兄に魅魘せられ、遂に冗長の駄言を題し、佛頂塗糞の非禮を敢て爲す事然り矣

餘白に一筆(二)

「福日の記者が流車に轢かれた」
 と言つて或日の朝淡水子アタフタと編輯局の階段を駈上つて来た、其の話を依ると何でも食堂で一抔聞し召してイザ下車せんと食堂車を出る時にウツカリ足踏外して線路に落ち込みビリツと車輪に轢かれたのらしい、淡水子見るからに齒痒いさうにして罵倒して曰く
 「ジーツに間抜けだなア、四十幾らと言ふ年をして誤つて流車に轢かれるなんて……我々の頭では何うしても有り得べき筈はないと思ふがなア」
 其後間もなく淡水子手首に繃帯を巻いて出版社へ来た、聞けば電車に飛乗り損なつて四五間引ずられたのださうで
 「人の悪口なんか言はぬ事だ」
 と恨めしさに手首の繃帯を眺めてゐた

(天津生)

私も其通り

紫雲山人

友人橋口天萍君、今回『四月一日』を出版するに就いて、僕に序文を書けと言ふ。外に書いた人はないかと尋ねると、之丈けあると言つて曉村、淡水兩君及び蘆葉女史の分を見せる。参考の爲に拜見すると、何れも細々と面白く書いてある。僕の思つた事は言ふ迄もなく、僕等の考へ及ばぬ点迄、事も細かに書いてある。今更僕が一生懸命に脳味噌を搾つたつて、これ以上立派な事も、これ以外新しい事も書けやう見込がない。サア困つた。

噂によれば、甌島か何処かでは人が死ぬと、數人打連れて忌間に行く。内一人が何とやら挨拶を述べると、残る面々は後から一齊に聲を揃へ「私も其通り」と言つて頭を下げるさうだ。

今、天萍君から序文を求められて困つてる最中、不圖此事を思出した。好い事を思出した。僕も此傳で行かう。旨い〜。

著者天萍君の爲人及び本書の價値内容等は、前記諸氏の序文に尽されて居る。更に僕の贅言を要せぬと信ずる。

『私も其通り……………』

乃で僕は此一言を借りて此所に掲げ、之を以てお茶を濁し得たものと認めて貰い度いと思ふのである。

著者より

△一ヶ月待てば總て新しい活字で綺麗に印刷が出来るのであつたが性急な著者は何うしても夫れが出来なかつた、然し順次印刷が進行して行く間に一方新活字も整理が終り序文丈は全部新活字を使用する事が出来た、本文と序文と体裁が異ふのは主として上記の理由に基く△著者の粗漏よりして最初の豫定より意外に行數が増へるので遂に「或る男の日記」は全部削除し又「好く似た女」も下半部を切捨て、「お福と言ふ女」と改題の止むなきに至つた、何れ他日機會があつたら改めて出版し度い希望を持つてゐる

△書中今上の譽が全上め譽となつたり蘆葉が蘆葉となつたり其他誤字や誤植が出来て遺憾であるが其中で短歌の間違つたのは特に一括して左に再録し併せて作者に御詫びして置く

小川 蘆葉

三月の濁りよどめる蒼空に花降りくだる黙してあれば(五頁)
奇術師の赤き頬にもしらくくと映ゆる舞臺の悲みぞあり(九六頁)

牧 曉村

夕暮に蟬せつくと鳴きひむかしに雲たなびきて蚊が一ツ来る

(一〇〇頁)

△本書の出版に一方ならぬ御援助を辱ふした左記諸氏に對し著者は

深く其の御厚意を感謝する次第である

表装	廣島縣賀茂郡内海	南 薫造氏
序文及短歌	鹿兒島朝日新聞社	小川 蘆葉女史
序文及短歌	鹿兒島新聞社	牧 曉村氏
序文	九州日々新聞社	郡山 春草氏
序文	鹿兒島新聞社	鹽田 淡水氏
序文	鹿兒島新聞社	重永 紫雲氏
寫真版	鹿兒島新聞社製版部	日高 照夫氏

大正四年五月七日

鹿兒島新聞社編輯局にて

余を生みて僅かに二年七ヶ月にしてみ
 まかりし母の墓前に涙と共に此の拙な
 き一書を捧ぐ

遺されし只一人の子

四月一日

△目次▽

誕生日	一
嘘つき日の四月一日	七
櫻島の冤ヶ谷	一〇
田の字揃ひの観菊	三二
恐るべきロシア魂	四四
琉球のいろく	五九
小供の頃	九二

虎列刺追出し	九七
氣まぐれ旅	一〇一
神代の飛行翼	一一一
妙な耻	一二三
露警記	一二七
咽喉を切る記	一四六
野球の回想	一五二
火遊び	一五七
死の戸口	一六七
に福と言ふ女	一七二

(目次終り)

四月一日

誕生日

天萍 橋口 勇 著

幾ら呑氣屋でも普通の頭を持つた人で自分の誕生日を知らぬ人は先づ勘いだらう、僕などは随分呑氣屋の上に人並外れて調子の悪い頭を持つてゐるに拘らず自分の誕生日だけは極めて明瞭に的確に憶へてゐる、何故そんなに的確明瞭に憶へてゐるのか？と聞かれたら少々返答に困る、有体に言へば僕はそんな細かい理由などは未だ曾つて一度も研究した事はないのである

然しながら自分の誕生日は兎も角よく記憶してゐる、強いて憶へやうと努力はしないが又決して其儘忘却もしないでゐる、少くとも僕丈には一年三百六

十五日の中で自分の誕生日程明諒に的確に意識せられる日は他にないのである、世間では善く

「一年の計は元旦にあり」

とか言つて馬鹿に正月を重要視するが僕などは精々餅か屠蘇位の事を考へる丈けで「一年の計」とか「將來の方針」とかろんな六ヶ敷い問題を頭にしたり事は滅多にない、只自分の誕生日に際して茲に始めて

「愈よ己れも何才になつた、人生五十年として後に何年しかない、之れからチト勉強して大臣にでもなるかな」

と所謂己れの將來と言ふ事を思つて見る、時には又

「あの女が己れの頬ベタを嘗めやがつた、ひどく呼吸の臭い奴で氣持が悪かつた」

などと逆に過ぎ來し方の事を想返す事などもある、先づこんな調子で年毎に巡り來る誕生日は少くとも僕に取りては正月よりも、彼岸よりも、節句よりも、一年中で最も印象の深い一日である
今年の誕生日……四月一日……にも僕は例の如く「愈よ何才になつた」と行く先きの事を思ひ又「あの女が」と過ぎ來し方を想返したりしてボンヤリして居た、然し考へて見れば一向詰らない話ぢやないか、毎年々々殊勝らしく過去に鑑み將來を計る事は計るが而も夫れが毎年々々只思ふ丈けで何にもなつて居ない、今年とて何か一ト仕事やつて見なくちやと色々智慧を絞つて見たが結局の所

「何か本でも出して見やうか」
と其儘無雜作に定めて仕舞つた

扱て極める事は極めたか一体「何んな本を出すのか」「本は出してもらうがウマク賣れるかどうか」とこんな事を考へると仲々一ト通りの事ぢやない、若しや運が悪くて百圓なり二百圓なり穴を明けたら誰が埋めて呉れる、借りた金さへ容易に返さぬ世の中である、況してや義理も責任もないろの金を「宜しよし」と出して呉れる茶人は先づ一人も無いと見なくちやならない

こんな風に考へて見ると何だか自分ながら薄氣味悪くなつて来る、失敗した時を假想して煎ト詰むれば疑ひもなく之れ僕の死活問題である、之れぢや輕々しく手は出されぬ事になるが然し又僅か百や二百の端た金が僕の死活問題となる様ぢや實以て情のない次第だ、セメテ五十万と上れば諦めもつくが百や二百ぢや我慢は出来ない、失敗した時は其の時で何とか方法が出来るだらう、兎に角男は思切りが一等だ、やるべしと一瀉千里の勢で可決確定、直ちに

其日に筆を執つて仕事を始めた

但し材料の過半は従來新聞紙上に發表した惡戯書きを其儘（中には幾分の改訂を加へたものもあるが）蒐めたので單に頁數を充たす点から言へば格別の心配は要らなかつたが而も此の貧弱、空虚なる内容を以て憶面もなく社會に押出さうとする無耻、無鐵砲の振舞に就ては誠に汗顔の至りに堪へない次第である

（大正四年四月一日）

三月の濁りどよめる蒼空に

花降りくだる黙してあれば

小川 蘆葉

牧 曉村

遊廓の芝草の上うへにうち倒れ弦歌の音ねを夢のやうように聞く
げらくと酔よひ吐はきながら遊廓の潮土臭しほつちくさき濱はまになしむ
ハケまじき蟬せみの聲こゑする、本ほんをふせ、思おもふふる里さとの榎えのきの蟬せみを
久ひさしふりに打ち揮うりし棒ぼうの百遍度汗ひゃくへんたあせの流ながるゝ心地こころちもよろし
土つちもまた嘆なげきのあるか、この頃ころはしきりに震ふるふ太息たいきづくこと

小川 蘆葉

つやゝかに光ひかれる皮膚ひふの生な々くし白しろくゆたかに若わかさずもゆる
水みづ淡あはき夏なつ來きにけらし胸むねの火ひのさめてすすしき朝あさもよひかな
やすけき生せいに痛いたく泌しみみ入いる原色げんしよくのかゝる刺戟しげきを求めもとめてやまず

嘘つき日の

四月一日

四月一日は西洋ではオール、フールス、デー。エアアル、フールス、デー(もう一
ツ何なんとか名ながあつたが忘わすれた)等なぞと言いつて随分馬鹿騒ばかさわぎをする日ひである、日本
では之これを萬愚節まんぐせつ、馬鹿日ばかび、嘘うそつき日ひ等ひなぞと譯やくしてあるが何なにつちにしても餘あまり善よさ
さうな名なま前まへぢやない、先日加治屋町かぢやまちにギター及およびハーモニカを一人ひとりで全時ぜんじに合奏がっそう
する事ことに依よつて有名ゆうめいなる失明しつめいの米國人べいこくじんスチルソン君くんを訪問せつもんしたら妹君いもごきみのステル
ソン夫人ふじんも在宅ざいたく又今また今回こんかい任期满にんきまん了れうの爲ため横濱よこはまより米國べいこくを經へて歸英きえいの途とちに上のほらんと
する元志布志中學もとしぶしちゅうがくの英語教師えいごけいしウイロコック嬢ぢやうも滞在中たいざいちゆうで例れいに依よりギター、マン
ドリン等らの彈奏だんそうがあつて大分賑たいぶんにぎはつた、此席上このせきじやうで四月一日しがついちにち即すなはち嘘うそつき日ひの話はなしも

出て又一としきり笑ひ合つたが元來此の嘘つき日には何んな嘘をついても亦何んな悪戯をしても構はぬ事になつてゐる、中にも性來悪戯好きの小供達は此日を一杯に暴れ廻るので五月蠅い事夥しい

「御母さん、御客さんですよ」

と告げらるゝまゝ急ぎ鏡に向つて身繕ひ宜しくあつて誰かど應接所のドアを排して静かに中を覗いても御客の姿は愚か猫の子一匹居ない始末「これ！トミ、御客さんわ？」と訊けば窓の外から

「オール、フールス、デー」

と来る、其他手紙が舞込むから聞いて見れば中には何も這入てない、近眼の入なぞは往來に何か包みが落ちて居るので拾つて届けやうと手を出ばスツと前に飛んで仕舞ふ、又手を出せばスツと行く、悪戯つ兒が細い糸で引張つて居

るのだ、又時には往來の真中に帽子が落ちて居る又例の悪戯だなど裏を掻く積りで足を揚げて蹴飛ばせば中には煉瓦が二ツ三ツ這入つて痛い、其の他見るからに美味さうな饅頭があると買つて食べれば中には餡のかはりに唐辛が一杯、アーベツく。チョコレートの煙草なぞには火薬を詰めてあつて何心なく吹かしてゐると突然ボンと爆發して膽を潰させる、万事が此の調子で「只今城山で人殺しがありました」

と警官までが一杯食はされる始末なんだから此日は料理屋、遊戯場、其他大抵の商店は皆な店を閉めて可成一杯喰はされぬ様に警戒怠りなしとは随分厄介な習慣が出来たものだ (大正四年四月一日)

白粉の肌さわりにも春深く溶き水もよし心冷たく

小川 蘆葉

櫻島の魔ヶ谷

本月十四日櫻島元湯石原畝八妻ケサツル(四)全三男奎太郎(十五)の兩名が全地を距る數丁山奥の怪谷にて毒瓦斯に打たれ母子枕を並べて變死を遂げたる悲惨事は當時の紙上に報導したる所であるが十七日鹿兒島警察署の鎌田警部、木尾警部補、警察部の香川技手の一行之れが調査の爲め警察署小蒸汽船鶴丸にて全地に急航したが實業、三州及本社記者も全行して詳細に實地調査を遂げたのである

十時出帆と言ふ前觸れなので九時半頃輕裝して水上署に驅込んだが香川技手只一人物淋しげに窓から外を眺めてゐる

「櫻島行きでせう？」

「エエ」

「全く命堵けですね」

と話題は言ふ迄もなく毒瓦斯の方に持つて行かれる、「瓦斯に打たれて死ぬと言へば世間の人は直ぐと炭酸瓦斯か」と早合點するけれど私の想像では無論十分に試験して見なければ確かな事は言へないが——舊火山と言ふ關係上硫化水素などぢやなからうか、亦硫化水素の出る場所には砒素なんか有り得きものだから自然砒化水素なんかも交つて出るでせう、要するにこんな毒瓦斯に打たれたが最後毒は身体中に浸透て手足は利かなくなる頭は痛む目は眩む聲を出さうにも口が利げず其儘バツタリ斃れるのだから「なんてソロ／＼薄氣味悪い話が始まる、之れア大變だ、記者も現場視察の積りで身仕度はして出掛け

て来たものの現場に行つて知らぬ間に瓦斯でも吸込んでパツタリ行く様ぢや詰らない

第一聞いて置かねばならぬ事は其の瓦斯の出るのが眼に見へるか耳に聞へるか鼻に感ずるか何うかと言ふ事である。

「すると其の瓦斯は色とか音とか味とか臭ひとか言ふ様なものはないのですか？」

努めて去り氣なき風を装つて夫れとなく質問を提出すると香川扱手は金縁眼鏡越しに一ト睨み、口元に皮肉な微笑を浮べ

「仲々色も味も音も臭ひもあるものぢやない、最も硫化水素なんか一種の特臭を持って居けれども厚い地層を通る間には全く臭ひは抜けて仕舞ふ實例は幾らもあるんだから」

オヤ／＼之れでは全く命堵けの仕事だと考へれば考へる程氣味が悪い、折から窓を通して吹き込む汽船の煤煙で何だか頭が痛くなつて来る

「僕の前任地兵庫縣でもろんな所はあつた様だが然し人でも死んだ話は聞きません、只コウ頭が痛くなつて氣が遠くなる位のものらしい、例の昔噺にある那須野の殺生石なんかこんな所から出た話でせう」

と此上更に變な話しが語り出された、一体香川君記者の顔色が讀めないのか、讀めて居て殊更に脅かすのなら土臺餘りに人が悪いや

二

話の序だから殺生石の由來に就て一筆書いて見やう、但し之れは勿論神話、口碑、傳説やうのものと御承知を願ひ度ひ

近衛天皇の侍女に玉藻前と言ふ者があつた、何所から来た者やら誰も知る人はない、併し其姿が如何にも美しいので大層寵愛を受けて居た久壽年間の或夜宮中で酒宴をお開きになつた時深更に及んで殿樓大に震ひ宮中の燈火は一時に消へて仕舞つた、見ると天子様のお膝下に居る玉藻前が身中から光りを放ちて晝よりも尙明かに見へたが不思議にも天子様は此時より重病に罹らせられ名醫の治療さへ何の効も見へぬ其所で陰陽師安部泰成を召して之を占はさせられた、泰成は先づ玉藻前に御幣を持たせ祝詞を宣ると玉藻前は堪らなくなつて御幣をすてゝ白狐となり下野國那須野の原に逃げ込み此所でも多くの人に害を加へた茲に於て朝廷から三浦介義純、上總介廣常、千葉介常胤を遣はして之を退治させることとなつたから三人は先づ走犬を以て騎射の練習をする、即ち

犬追物とは此時から始まつたのである

やがて三人の大將は那須野へ行つて例の白狐を狩立て義純の矢で是を射殺してしまつた、其後百年程の後に狐は化して靈石となり鳥獸類の是に觸れたるものは忽ち死んで仕舞ふので是より殺生石と名付けられたさて御深草天皇の時僧玄翁に詔して殺生石の怪を熄めしめられた、玄翁は勅命をかしてみ下野國に下り、見ると石の左右には累々たる白骨が山の様積れまてある、ろこで玄翁は杖を上げて石を打つと石は忽ち破れて微塵となり四方に飛散して無くなつて仕舞つたと言ふ

「忽ち死んでしまふ」なんて甚だ手酷い話だが夫れでも杖で打つ位いで済むものなら大に助かる譯なれど高が味噌摺小僧程にも行かぬ記者等のステッキ位ぢやトテモ利目は御座るまい

甚だ面目もない次第だが瓦斯と殺生石の話には懲々だ、更に此上餘計な口を切つて尙も猛烈な所を聞かされちやウーンと目を廻して仕舞ふ計り、構はないから急に腹でも痛いと言って櫻島行きは止めにしやうかと身相應な考へを起して悄然と黙り込んでゐる所に三州の松下君が「ヤア」と威勢善く乗込んで来た、見れば右手には銀金具涼しげな杖が握られてゐる、之れなら少し利目がありさうだと聊か氣勢を増した所に鎌田警部、木尾警部補の兩君も佩劍の音勇ましくやつて来る、何れも顔は晴れやかに輝いて曇りの色は露程も宿つて居ない、斯うなつて見ると今更ら記者の取越苦勞が耻かしくなつて来る計りだ、最後に駈付けた實業の猪俣君の腋下にも握り太の杖を抱へてゐる、サア之れで益々大丈夫と言ふものだと俄かに元氣づいて「ドヤ〜」と小蒸汽鶴丸に飛乗リスクリウの潮掻く音勇ましく水上署下の錨地を離れたのは豫定を一時間後れて丁度十一時。

三

公用を帯びて横山に出張の津曲獸醫便乗の故を以て汽艇は少しく針路を變へて先づ横山の渚近く寄せて津曲君を送り夫れから愈々此日の目的地たる東櫻島村元湯に向つた。途上聊かなる驟雨に出會したるも元より格別の事なく颯々たる涼風に夏を忘れ青々と心地善き計りに蜿蜒り来る潮を蹴破つて海上無事元湯に上陸したるは丁度午后一時、出發以來已に二時間を要した事になる、觀音崎を廻る頃から急に北東の風面に立つて僅か十噸足らずの小艇は寄せ来る大波に揺られて時々、トツと潮水は頭から跳り込んで座り場所の悪い香川君なんか「之れアいかん」と大分閉口してゐる、夫れ見たか最前から人を脅かした罰だ、船に御弱い鎌田警部は努めて弱味は見せまいと佩劍片手に威儀を正して御座る

けれど隠すより顯はるゝの譬へ、ともすれば型が崩れて頻りに首を長くして

「こらまたぢやろから」

とは可笑しいやら氣の毒やら、之れに反して猪俣君なんか揺れるのが善い心持だどコクリくと居眠りの態とは扱て世は様々なものである

元湯は古里と有村との間にある小部落で戸數と言つても二十戸の上は出まい、御粗末ながら海岸に温泉場もあつて二三の浴客らしい人も見受けた、一行は特使を有村に派して村役場員の立合を求めたが其間に妻と愛兒とを亡ふた不幸なる石原畝八の一族を慰問した、大久保中將の積善福壽の扁額を掲げたる床の間に二箇の生々しき位牌が燈明香煙裡に無限の哀愁を語つてゐるのには頗る變な氣がしてならなかつた、主人畝八は野良仕事から急ぎ歸つて汗を拭きく朴訥なる口で當時の慘狀を物語つたが之は當時の本紙に詳しく出て居るから此所に

は省畧する事とする、但し最も注意すべき事は遭難者ケサツル(四三)は性來俗に言ふ癡持ちで又二男李太郎(十五)も當時胃を病み現に當日迄も服藥中であつたと言ふ事である

記者は元より化學や醫學に就いては全く門外漢である、然し生物が毒瓦斯に中毒して死ぬと言ふのは誰でも一様に全トだとは言へまい、必ずや其人の體質の如何に依りて夫々異なる所あるべしとは何人も想像するに難からぬ、又實際動物試験の結果を人類に應用する場合などは最も兩者の健康状態及体重等に注意を要すると言はれてゐる

本日の臨時休業を利用してツイ先刻着いた計りだと言ふ浪銀支店の瀬戸山君も來合して

「瓦斯ぢや無えが、ラヂウムぢやつと」

と袖を捲り金の腕輪をヒカつかせてカミ返つてゐる、ラヂウムで人が死ぬかど
うか知らないが兎に角死ぬ丈けのラヂウムがあれば豪いもんだと大分話しは面
白くなつてモウ此場で櫻島ラヂウム株式會社位出來さうな氣勢を示して來たが
其内村役場から竹下助役が來り迎へ話丈けちや仕様が無いから兎に角行つて見
やうかと香川君が用意の試験用藥品を始め竹竿、麻繩、提灯等を用意し別に土
地の若者數名と共に愈々此の恐るべき怪谷の探險にも出發した

四

此の恐るべき怪谷は元湯の海岸に洗出す谷迫の間にあるので俗に榎木平或はシ
キノアガイカワラ(濕氣の上る河原)と稱し元湯からの距離は僅々四五町と隔つ
て居ない、右手はザラ／＼に崩れ易い高さ十間許りの砂崖となり其上は一面の

畑地が平らかに續いて常に農夫の影が絶へない、左手は急斜面の雜木林で其儘
ズーツと櫻島の絶頂に續いてゐる、谷迫と言ふよりか寧ろ「岸險」と言つた方が
適當だらう、此の岸險底は巾一二間の凹凸の激しい輕石交りの細長い流れとな
つて居るが兩側は雜草繁茂して晝尙暗く何となく薄氣味悪い所である、而て此
所の一段低ふなつた二三坪の間から毒瓦斯を湧出すると言はれ數年前迄は時々
狸などが斃れて居たさうである、今でも蝶、蛇、蝮蛇及鳥等の屍体は何時も絶
える事はない、現に其日も無数の蝶と三羽の鳥の屍体が現場に散亂して居た、
而て此の瓦斯は季節に依つて湧出の量が異なるさうだ、即ち冬期は少なく夏期
に多い、夏期でも殊に南風の日には臭氣頗る猛烈にして到底附近に近寄る事は出
來ないと言ふ、兎に角毎日温度や風位天候其他に依つて瓦斯湧出の状態は常に
一様でない

然し此所に我々が不思議に堪へない事は此の怪谷に斯の如き恐るべき明白なる事實があるにも拘はらず附近の村民は只「氣持の悪い所」と云ふ觀念の外別に生命でも取られる恐ろしい谷だと恐怖の念は毫も無い事である、既に鳥や獸が死ぬと言へば人類にも危険だ位の事は直ぐに考へられさうなものだ、無智の村民は致方ないとして全地方の小學校教師や或は駐在巡査等にして之迄何等の踏査研究をもなさなかつたと言ふ事は餘り呑氣すぎる話ぢやあるまいか

こんな事は今更何と言つた所で仕方のない話だが兎に角我々は右手の方からザラ／＼の輕石を踏み滑つて漸次谷底に下りたがどうも思へば餘り善い氣持はしない、村の若物は平氣な顔で現場近く三四間の所まで近寄るので

「餘り先き行くな」

と後からハラ／＼氣を揉むと言ふ始末、先づ四五間位の竹竿に点火せる提灯を

吊して靜かに下してやると地上五六尺の邊は別に異状がないが三尺二尺と下して行くと忽ちアツリと消へて仕舞ふ、數度繰返して試みたが結果は矢張り全トである、此の物凄い現象を眼前に實見したる一同は思はず

「オー有つぞら！」

と五六歩後ろに引退り只ならぬ不安の色は人々の顔に現はれて来る、大きな聲ぢや言へないが△△君始め遙々鹿兒島から御乗込みの御方々は常に現場より最遠距離に有りて口丈けが目覺しく活動したのである、次に香川君が用意の試験液を白布に浸して現場に吊り下げ反應の有無を試験し、最後に全トく竹竿を利用して現場の砂を一合位採取して一應此所を引揚げたが途中竹下助役は現場附近に斃死せる一羽の鳥を拾得した、未だ口には生々しい草を喰へて居る所から考へると恐らく本日中に斃死したものだらう之れも有力なる研究材料として讓

受け元湯で汗まみれになつた手足を洗つて再び汽艇上の人となり全地を出發したのは彼は四時前であつた

五

足一度び櫻島の地を離れるやホットト呼吸胸撫で下して始めて人心地に返つて來た

「御互ひ無事でマア善かつた」

と誰か、太息と共に吐き出した獨白は全く懸値の無い心其儘である、

「記者は歸りには誰か一人位は抜ける事だらうと思つてた」

なんてツロく、持前の皮肉が始まる

「御自分が抜けさうな顔色をして居た癖に」

とモウ斯うなれば魔ヶ谷も一の谷もケロリと忘れて一人々々に大きな顔をしてゐるがツイ十分前までの一同の蒼い顔つたら夫れは實に見られたものぢやなかつたせ、夫れらか話は轉々して遂に食物の事になつて來たが牛肉、馬肉、鶏肉、鴨肉、雉子肉と更に進んでは狗肉、猫肉、烏肉、鼠肉と段々雲行きが怪しくなつて來る、木尾警部補なんか大抵の肉は食つた方だが烏丈けは糞臭い様で咽喉を通らなかつた鼻を歪めて見せる、すると今度は蛇の肉、赤蛙を其儘、鼠の腹兒の味噌汁浸け、扱ては蝦蟇なすと不氣味な話が語り出されたが如何に何と言つても蝦蟇丈けは御免を蒙り度い、最後に人肉となつたが之れは實地に經驗の無い人計りで美味しいの美味くないのと言ふ事は結局決定を見るに及ばずチヨンとなつた

扱て鎌田警部、木尾警部補は横山に一寸取調べの要務があるので汽艇は再び横

山に投錨したが出帆迄には彼是小一時間も暇がありさうだから我々四人も一緒に上陸した、何より先づ腹が空いて堪らぬのでツロく歩いてみたけれど一向腰でも掛ける様な所もない、漸く旅人宿と書いた家を見付けて飛込んだが内はガラシとして人氣もない、ハテナと四人小首を傾けてゐると五十位の皺くちゃ婆が腰巻一ツで飛込んで来て「サア何うかうチお上いやつたもし」と此時始めて自分が裸だと言ふ事に氣が付いたと見へて急いで縁側の隅に押込んであつた汗臭い巻袖を引かけるぢやないか、一同互に顔を見合してキョトンとして居たが夫れでも餌ト一杯で卵子は無いかと聞いたら「アノ卵子はゴアハンとオー」と来た、仕方がないからブラリと此所を出て只當てもなく近所の民家に侵入して此所でも卵子をと求めた、何でも四五軒から持寄つてヤツと一人前四個宛集まつた

「三ツ位で満足する人は無いかね」と言つて見たが誰一人諾と肯づく者もない斯くて一行が横山を出發したのは、午後六時、別れ際に附近に游泳中の兒童に銅貨を海中に投つて拾はしたがツブリと水底に潜るや譯もなく片手に銅貨を握つて水面に現はれる、洋行歸りの先生方は印度人の兒供が船客の投げた錢を拾ふなんて得意氣に話してゐるが横山でそんな話をしたら笑はれる鎌田警部の一行は待たせ賃に一瓶の焼酎と一籠の桃とを土産に用意仲々に周到を極めてゐる、記者は酒と煙草は一切用ひない事にして居るが香川君から「酒を飲んで居れば瓦斯には中毒しないものだ」と聞かされて居たので譬へ極めて少時間で且つ比較的接近はしなかつたにせよ彼の恐るべき魔ヶ谷に這入つた以上多少の瓦斯は吸込んで居ると思はなければ

ならぬ、するとソロ／＼毒が廻つて今夜あたりはコロリと行くかも知れない、廿五六の今の身で死ぬのは詰らない、此所で飲つて置けば先づ今夜の心配もない譯だ、妙な所に理屈がついて茶飲茶碗に波々と注ぎ入れ之れに眞紅な桃を刻み込んで赤くなつた桃酒を矢鱈にガブ／＼引かけた、

ホイ！何時の間にもやら艇は水上署下に錨を入れて居る

六

之で一行先づ々々無事に生きて歸れた譯だが扱て其後衛生課で研究の結果は果して何うなつたか？何人も聞き度い事だらう、之に就て香川技手の語る所に依れば「現場で試験したのは鉛糖紙即ち醋酸鉛で試験したので若し硫酸瓦斯に觸れるれば直ちに硫酸鉛を生卜て黒褐色に變ずるのですが當日は此の反應は出な

つた様です、夫れから土壤の分析もやつて見ましたが何分あの位の少量では之れと言ふ結果も得られず甚だ遺憾に堪へない次第です、然し當日現場附近で拾得した烏の死体解剖の結果は頗る注目に値すべきもので呼吸器を犯された形跡は明かであるけれども消化器は何等の異状を認めないのです、殊に肺臓が著しく萎縮してゐる點などから推定して大抵瓦斯中毒と言ふ事が出来る、而て消化器の一部其他血管の所々に紫黒色の斑点が現はれて居る点などは善くケツツル母子の死様に似て居るから全く同一の原因で斃れたものと言ひ得られる」之に依つて見れば、正体は判らないとしても、兎に角魔ヶ谷に動物の生存を妨ぐる有毒瓦斯の存在する事は疑ふべき餘地がない様である、此の瓦斯が其所の地中から天然に發生するのか或は方々から自然と其所に集合するのか確かな事は判らないが前後の事情及現場の地勢等より推して考へると何うしても地中よ

り發生するものどしか考へられない
 由來廢坑に入り或は古井戸に墜ち窒息して絶命する事は往々聞く話だが此の魔
 ケ谷の如き地勢の所で而も殆ど同時に二人迄も枕を並べて斃れると云ふ事は實
 に前代未聞の大怪事である、全所は谷迫或は岸險とは言ふものゝ決して左程深
 く険しい場所でもない、僅かに民家を距る四五丁の山手になつて居て村民が薪
 取り草刈りに行く通路になつてゐる位だ、斯の如き場所で突然人が二人迄も一
 寸の間に死んで仕舞ふ、實に奇怪至極の不思議な出来事ぢやないか、尤もケサ
 ツルが他に場所もあるのに何故特に村民が妙な所だと言ふ此の魔ケ谷を擇んで
 草刈りに來たかと言ふ事にも疑問はある、確かな事實に依れば夫賊八は現に他
 に情婦があつて従つて兎角家庭も亂れ勝ちで夫れが爲めケサツルは自殺の目的
 で全所に這入つたのぢやないかと言ふ噂もある。然し記者は此の噂は絶対に否

認する、現に其日現場には二把程の草を刈つてあつたと言ふぢやないか、自殺
 する氣の女が何を苦しんで馬鹿正直に草なんか刈るものか、夫れから跡を尋ね
 て行つた李太郎も僅かの間に斃れた事實等より考へて其當日は特に瓦斯の發生
 が猛烈であつたと想像されるが要するにケサツル、李太郎母子は當日全く偶然
 に全所に踏み入り不幸なる最後を遂ぐるに至つたのだと認められるのだ

(大正二年七月)

牧 曉村

墓 叱といへどのろりともせぬ面憎さ土くれを投ぐ

子は何時がわが傍に來て寢入りけり父らしき氣になりもする哉

小川 蘆葉

あぶらあぶらわが全身の皮膚の上にはトめる脂もやしてみたや

田の字揃ひの観菊

上

揃ひも揃つたものだ、田の字許りの名前が、先づ庶務部から言ふと主任飯田を筆頭に宇田、江田の三人、悉く田の字揃ひで更に編輯局からは主筆津田、池田と全トく田の字で只僕の橋口丈けが退け者になつて居るが夫れでも中に十の字が足りない丈けマア似たり寄つたりの六人者が二日の日曜を利用して吉野一帯の観菊と洒れ込んだ

前日の評定で集合の場所は長田町の津田子宅、時刻は朝の九時、少々後れたつて罰金も何もなし、雨天或は其の虞ある時は中止と話合ひが出来て居たので朝起きると直ぐ寝ぼけ顔をこすつて空を仰いで見たら天曇り風寒し、然し誰の眼

にも雨は降るまいと見られるので兎に角行かうと思つて居る所に俄かに下腹がキューと痛み出して来た、ソツと耐へて少し快くなるかと思ふと又キューと来る、倍て困つた今日は頭止めかど便所へ這入つたら切つて捨てた様に療つて仕舞つた、之れなら大丈夫と身軽るに装つて下宿を飛出したのは正に九時半、約の如く津田子宅に御免と怒鳴り込むと御母さんと夫人と書生さんと三人吃驚りして玄關に出て來られた、ろして

「菊見に入らつしやるのでせう？」

何も彼も呑込んで居られる、然し此の空模様では果して出立ちがあつたらうかとも氣遣はれるのでモウ御出でになりましたかど聞いたら

「ハ、はんの今出た計りで」

どて一葉の置文を渡された

タンタド坂を真直に太鼓橋を渡り原小學校門前を右に折れて牧三之丞氏宅に入る云々

タンタド坂、太鼓橋、原小學校、牧三之丞、皆な知らない、聊か不安ではあるがホンの今出た計りどあれば途中で追付くかも知れない、追付かないとしても道々で聞いて行つたらと持つて生れた無鐵砲の氣分に任せて一行の跡を追ふ、堅馬場の俵帳場にタンタド坂は何所だと聞くと通菟りの荷車を指してあの後から御出でになれば間違ひありませんと丁寧に教へて呉れたので其の後からトンク歩いて行くと幸にも家鴨馬場で田の字揃ひの一行五名に追付いた、田の字揃ひの上に何れも御人好し揃ひと來て居るので遅かつたと小言一ツ喰はずにタンタド坂に乗かゝつたが此附近一帯の地又自ら別個の氣分に富んで頗る非常に一行の御意に召し此の邊に住つて見たいなると仰せられる方も二三に止らな

かつた、電車でも通ふ様になつたら住宅向きには至極適當の地域となるだらう、扱て坂は大分長いので津田、飯田子なんか少々(實際は大分)御難儀相に見へたが幸に何の事もなく登り盡すとモウ此邊は所謂吉野原となるのだ、四方遠く展けて流石に捨て難い眺望である、間もなく小坂一ツ下るとさゝやかな小川が緩やかに流れて例の太鼓橋が架つて居る、多分稻荷川の上流だと思ふが河床落ちて深く兩岸の岸壁苔滑かに趣き多い流れではあるが惜しい事には水が濁つてゐる

中

太鼓橋を渡ると直ぐ左手の柿の木のある所が別府晋助、少し距れて右上手の茅葺の百姓屋の隣りが桐野利秋兩雄の誕生地であると最前から西南役の史談に快

辯を揮つて居た兵右衛門子此所に至つて右顧左眄握太のステツキを西東に打揮つて吾を忘るゝ熱心なる説明は流石に五人の一行耳を澄まして傾聴する、聽て又小坂一ツを越せば間もなく始めて見る原小學校の門前に來た、實を申せば僕も好い加減に疲れて居る、此上五間も先きに行くのは厭だ
 全トく兵右衛門子の案内で牧三之丞氏宅に入れば中門越しに數十鉢の菊花は今を盛りと咲き亂れて眩しい計りの美しさである、此時まで花の手入に餘念なかりし主人三之丞氏は直ちに手足を濯いで一行を迎へられたが江田子は菊には多少の經驗があるので可なり話が合ふ様だが残り五人は只ボカンと之を聞いて居る丈けだ、其中飯田、宇田の兩子は碁盤を圍んでバチ／＼やり始める、江田子は尙も話足らぬと見へて別に聞かして呉れども言はない津田子を取つ捕まへて頻りに菊花栽培の講釋を始めた、格別注意して居なかつたので詳しい事は記へ

て居ないが何でも
 「田圃の泥を持つて來て人糞と捏合せ、日に燥かし更にモウ一遍人糞を交合せツイツを床下に積立てゝ置いて其の泥糞を鉢に入れ」
 なんて言ふ様な事を喋舌つて居た様だ、
 「ろりや大變だ……ろんな事をするのなら菊培りは止めだ」
 とやられて江田子聊か腰を折られ啞然たる所に主人公の厚意になる酒膳が運ばれて來た、所が此の主人公又恐ろしく酒の強い人で飯田、宇田、江田三子相手に早くも箸戦が始まる、御耻かしい話だが飯田、宇田兩子は一堪りもなく首を搔かれ江田子も始めに少しく粘りを見せた丈け、後はグニャ／＼となつて仕舞つた
 サア斯うなると主人公の鼻呼吸の荒い事つたら丸で亞弗利加の砂漠に吹捲る熱

風の如しで味方に吾れころと太刀を合せんとする人もない、只宇田子の酒量に依つて辛ふトて全滅を免れて居る惨めな有様だ、と言つた丈けぢや此人は只武骨一片の男どしか思はれないが去年菊見に來た友で間もなく病死した親友を偲び

去年の秋共に眺めし白菊の

手向けの花となるが悲しき

なすと優しい心を歌にするわたり確かに文武兩道イヤ文酒兩道の達人である、斯くて大の男六人が只一人の主人公に散々苛め廻されてへトトに參つた頃吉野名物の鶏飯を振舞はれた。チト脂濃い所はあるが空腹と來て居るので膳立も整はぬ中から早くも箸を取る無駄けを當り前の事の様に平氣でやる始末 ナニ儀式の爲めの鶏飯ぢやあるまいし食ふ爲めの鶏飯ぢやないか、作法の儀式のと

氣を揉む場合は別にある筈ぢや、申譯の理窟はドウでも善いとして二膳も食べない中に一杯になつて來た、少し残して置いて菊でも觀ながら悠り仕舞はふと背後を向いて居る隙に何時の間にかやら三膳目の鶏飯が山盛りになつてゐる、小供の時分に吉野はオサン狐の棲家と聞かされて居た、サテは狐の仕業かと思案して居ると忽ち

「モウ一杯食へ！」

と退引ならぬ主人公の命令だ、厭やと言つたら首でも落ちさうな権幕なので眼を白黒にして無理に三膳目を平げ終ると六人一緒に強引の退却を試みて厭應なしに庭に下りて仕舞つた

下

斯うなれば大河の決する所流石の主人公も如何とも手のつけ様がない、少し狼狽て氣味に酔歩蹣跚として我等の尻からついてやつて来る、酒を離れりや全く我等の天下だ、四十五と善い年をして(但し僕丈けは段違ひに若い)、一行主人公の厚意で贈られた黄白の菊花を中折のリボンに挿ひやら根ごしに引抜いてステツキにブラ下げるやら誠に他愛もない好ボンチ繪たるを失はない
 途中村營の模範農園に立寄つて綺麗に咲き亂たる菊なを頂戴したが僕は深紅のダーリヤ一輪を摘んで帽上の白菊に挿添へ丁度午後三時過ぎ此所を辭し愈々雀宮に於ける菊花展覽會へと志した、此道は三四年前弟と一緒に吉田村からの歸りに通つたど覺へてゐるが一体が高原中の道路とて何となくスガ／＼しい氣持ちがする、櫻島もツイ目の前に兀として秋天に聳へ錦江の海遠き彼方には開開の峯影も望まれて何処となく景色が大きい、吉野の地由來桐野利秋、別府

晋介、川上操六、山内半左衛門等諸將名士の出生地である此の景色と此の名士と相對照して見ると頗る面白い

斯くて間もなく雀ヶ宮白山神社なる展覽會場へと入れば境内紅白の幔幕を張廻し中に大小三百餘鉢の菊花を配色面白く陳列してあるが何れも此地方天狗連の自慢の品丈けありて何れも是れも皆一等賞に這入りさうだ、江田子は照國、雪月花、今上の譽等を除けば後はモウ平凡だと思つた事を言つてゐるが僕は今上め譽が最も氣に入つた、實は買ふて歸り度かつたけたをも途中の難儀を思つてはドウしても手出しが出来なかつた

此所で僕が不思議に思つたのは數ある鉢に賣價を貼出してある中で三四十銭が普通で七八十銭を最高とし一圓と銘打つた品は皆無だと言ふ事である、三四十銭乃至七八十銭と言へば成程決して廉いとは言へない、然し田圃の泥を持つて

来て二度も人糞を交合して乾かせた上更に床下に積立て、置いたのを鉢に移して育て上げた菊としては餘りに貧しい報償ぢやあるまいか、江田子最前の講釋も何だか當てにならない様な氣がする

鹿兒島市から長い坂を登つて菊見にとやつて来る其道の通人連や夫婦連れ小供連れ友連れ犬連れ猫連れの人々も大分見へるが社の飯田(惟)、寺田兩子も来て居られて妙な所で出會したものだお互にヤアと挨拶を交はしたが妙な事は之れに止まらない、兩子共同トく田の字揃ひと來てるから更に妙だ

此所で三之丞氏と別れを告げ案内知つたる兵右衛門子の手引で特に廻道をして磯集成館横手に出で夫れからブラリくと名にし負ふ磯街道を辿つて永安橋を渡り此所で四人と二人の二手に別れ夫々歸宅致したがドウしても今日は四里以上の道は歩いたらう、然し加治木から鹿兒島まで六里餘の長程を一時四十何分

で突破した各中學選手の事を想へば主催新聞社の社員としてア、疲れたとは言ひ悪い譯だ

(大正二年十月)

小川 蘆葉

女と云ふ性が哀れむ心より花をめぐるとどがめたまひろ
たまゆらをおびやかしく魔の影の恐るしき夢とはのけよかし

牧 曉村

父の墓に働きて掃除なしぬればよき事をせし氣持になりぬ
明日は又手の白き労働者となる身が妻よ何か御馳走をせよ

恐るべきロシア魂

▲本年七月末の或夕方、記者は日中炎熱百度の苦惱から逃れて晚餐後ブラリと宿を出た儘何所と言ふ當てもなく市中をブラついて丁度灯點し頃海岸第一棧橋附近を朝日通りの方へと歩いて行つた

▲棧橋を中心として海岸一帯の熱帯は何時もありはないが丁度其時は沖繩通ひの汽船が入港した際とて附近は船客、船員其他出迎ひや何かの人々で更に一段の混雑を極めて居たが記者はフト人の群れ、來往の車、貨物の間から數多の彌次馬に圍まれながら棧橋を渡つて上陸して來る一人の西洋人を認め

▲身の丈けころは五尺五六寸もあらずが年齢は漸く二十才になるかならぬ位の

青年で如何にも其の身装りが汚ない、第一頭には黒色の古び切つた烏打帽を頂いて赤の堅筋の通つた更紗か何かのシャツを着込み其上から巾廣の胴締めを着けダブ／＼して古び果てた黒のツボンに恰も兵卒の履きうらな無格構な靴と言ふ扮装でドウもロシア人らしいが餘りに其の服装が見すばらしいので記者は大方舶來の乞食か何かだらうと鑑定した

▲此の西洋人はツツク製の大きな袋を幾つも背負つて群がり寄する彌次馬には御構ひなしにツカ／＼と棧橋前の共進組店內へ這入つて行つた、物數奇な話だが格別差迫つた要事もない身体なので記者も彌次の一人となつて共進組の入口に立塞がり一体何者だらうと頻りに中を覗いて居た

▲此の西洋人は丸で日本語を解しないらしい、汽船の事務長らしい人が通譯して稍暫らく何事かを語つて居て應て何處へか立去つた、後には件の西洋人が只

一人如何にも術なさうに行李だのツツク袋だのと五六個の大きな荷物を取片付けて居る

▲記者少しく英語を解する、ヒヨイと話掛けて見る氣になつて彌次の少しく散らした頃を見計らい店内に這入つた、ろして

「何所から來なさつたか」

と禮儀も何も抜きにして無茶苦茶に喋舌り立てたが夫れでも相手は大分嬉しかつたと見えて熱心に色んな事を話して呉れた

▲始めロシア人と睨んだ記者の豫想は果して適中した、然し舶來の乞食と鑑定したのは大變な間違ひであつた、ロシア國キエフ市の大學生だと聞いちや讀者も驚くだらうが記者も驚いた、實は只其の服装のみを見た丈けで輕卒にも浮浪者の乞食のと早合點した記者の心中の淺慕なさが情なく思はれてならなかつた

▲大學生の名はウラヂミル、ナウモウイツチと呼び年齒僅かに十九才だ、露國南西部のキエフ省の首都キエフ市大學に籍を有し今夏期休暇を利用し南部日本の博物研究の爲め西亜利亞鐵道にてハルビン、大連、門司、鹿兒島を経て沖繩に渡航し前後二週間同縣下を隈なく踏査して今其の歸途にあるので之等の行李だのツツク袋なんか皆な全島で採取した標本を一抔詰めてあるのだと傍らの荷物を指しながら會心の笑みを浮べて居る

二

▲記者は此の話を聞いて全くナウモウイツチ君の意氣に感心して仕舞つた、全時に此の意氣あるスラブ民族の胸中に潜めるロシア魂が將來果して如何に生長し發達して行くかを思ふて記者は私かにロシアの將來を畏怖せずには居られな

かつた、誠に將來恐るべきは此のロシア魂である

▲キエフ市と言へばモスコの南西約六百餘哩を隔てたる大都市（人口約三十五万）である、此所から大連迄の里程はドウしても四千哩を超へて居る筈だ、更に沖繩縣下まで行くとするれば彼是五千哩と言ふ長程となる

▲僅か十九才の少年ウラヂミル、ナウモウイツチ君は六月十三日單身キエフ市を出發し五千哩の漸陸を突破し東洋の果てとも言ふべき我が沖繩縣下に渡航し學術の研究を遂げたのだ、而も七月八月と言へば鹿兒島でも酷熱堪へ難き頃である、此時琉球は殆ど熱帯と言つても差支へない時節ぢやないか
勇敢なるナ君は此の熱帯の炎暑を冒しハブと言ふ恐るべき毒蛇の群棲する深山幽谷を約二週間限なく踏査して熱心に各種の標本材料を蒐集したのである、記者は此の話聞いてすつかりナ君の意氣に惚れ込んで仕舞つた

▲之を我國學生の現狀と對照して見ると大變に面白い、ヤレ温泉の、ヤレ海水浴のと愚圖づいて暖昧宿屋の二階邊にゴロ／＼やつて居るのは少々譯が違ふ様だ、十年前の昔の戦争話を御苦勞にも今日まで持越して戦勝の一等國の頂天になつてゐる國民は御目出度い限りである、十年前は十年前だ、今は今だ、此の兩者を混同しては困る、十年前と今日とは日本も露西亞も英國も米國も何所も彼所も天地雲泥の變化を來してゐるのだ、夫だのに十年前の夢を追ふて只ボンヤリと一等國と自惚れて覺めざる國民は情ない一件だ

▲成程我國は十年前に戦争で露西亞に勝つた、ろして償金は半文も取れず一年の半期は風雪に鎖されて呼吸も出来ない様な樺太の半分を貰つて領土擴張だなんて喜んでゐる、爾來我れは果して何事を以て露國に勝つてゐるとがあるか
▲我國民が左程香しくもない戦勝の夢に酔ひ世を擧げて輕跳の風習に移り行く

間に露國は戰敗を傷まず不寧を之れを好讐として營々攻々無言の裡に所謂戰後の經營に歩一步と基礎を固め今や産業興り貿易盛んに財力、軍備兩ら整備し戰敗の創痕は全く回復してゐる

▲現に極東に於ける露の駐屯軍丈けでも我國常備軍の二倍以上を有する事實は知らない人が多いだらう、兎に角日露兩國民の意氣は現に大なる相違を來して居る、何よりも此の少年ナ君が夫れを事實に証明して居るではないか

▲こんな風に記者はナ君が酷く好きになつて何れ明日暇があつたら市中を案内して上げやうと約束して一ト先づ此の日は別れの握手を交はした

三

▲借翌日は少し忙しかつたけれども無理に暇を作つてナ君と再び共進組店内で

會見する事になつた、其日の午後五時出帆の汽船で長崎に向け出發する筈だから何か紀念の爲め土産物を買ひ度いが當地の特産物と言ふものはあるまいかと相談を持つて來た

▲サア特産と言つても錫器や薩摩焼位のものだらうが兎に角實物を見に行かうと二人一緒に先づ石燈籠通りの慶田陶器店に這入つて色々品物を調べて見たが色彩や型などが一向ナ君の氣に入つたものがない

▲ヤツと之れと手に取つたのが何でも十圓近い一組の茶器であつた、丁寧に箱に詰めて貰つて更に茶臺を買ひに錫器店を覗いたがナ君は只一語

「色がらけな」

と碌々見向きもしない、其の筈だ、常に寒國のロシアに在りて氷雪に生きてゐる民族には銀や錫の色合は馴れて月並で少しも珍らしい事はあるまい

▲チャ仕方がないから塗物を見やうと漆器店に這入つて琉球塗の茶臺を買取つた、夫れから更に履物商で國の妹に土産にするのだと綺麗な千代田草履などを購め之れで一ト先づ買物は済んで左様なら有難ふと別れる事になつた、出帆の際棧橋まで見送りに行く積りであつたが色々仕事が忙しかつたのでツイ見送りも出来ずナ君は遠く四千餘哩の彼方なる懐かしき郷國キエフ市に向かつて我が鹿兒島を出帆したのである

▲夫れから凡そ四十餘日後の九月十一二日頃美少年の給仕染川君が一通の外國郵便を配つて呉れた、外國郵便は時々受取つて居るので格別珍らしい事もないが今度は切手がロシアのだ

▲一体誰から？と封を切つて見ると中からバラ／＼と無数の古切手が現はれ出

でた、十四種二百五十枚を丁寧に同種は一括りにして紛亂しない様にどの注意は善くこんな細かい事が出来たものだと感心せざるを得ない

▲之れ即ち吾が親愛なる露國キエフ市の友人ウラヂェミル、ナウモウイチ君からの信書である、而して記者は此の信書に接して更にナ君の信義に厚きに感服して仕舞つた

▲實は記者去四十四年頃から郵便切手蒐集の趣味を覺へ日本のは勿論海外までも手の届く限りの事をして現今は二百四十餘種二百七十餘枚に達し中には随分古いものや珍らしい種類もある

▲第一棧橋でナ君に逢ふた時も話の序に例の切手交換を申込んだ所がナ君は言下に快諾して呉れた、爾來一週間か十日の間は切手の話も覺へて居たが十五日二十日と經つて從つて何時しか全く忘れ果て、其日／＼の雜務に追はれ居た

▲斯る所に突然ナ君の信書に接して記者は第一ナ君の然諾を重んずる其の情誼に感ト同時に我が身の約を破り否約を忘れ言を食んで平然たる背徳の行爲を耻しい事に思ふた、誰も此の事情を知つた人はなし又其處に居合す人もなかつたけれども記者はナ君の信書を手にして一人で顔を赫くせずには居られなかつた▲土臺ロシア人は根が至つて素朴て大ザツバな所がある、七月炎暑の眞最中に遙々五千哩を踏破してハブの群棲する沖繩の幽谷を單身探險する様な豪放の一面には又一句半言の約をも重んトて忽にせざる眞情がある、殊に夫れ小さな郵便切手を五枚十枚宛括分けたり妹に土産だど千代田草履を買つたりする所なんか如何にも無邪氣で面白いぢやないか

四

▲斯くの如く何から何まで散々感心させられては如何に薄野呂の木像漢と雖聊か以て面喰はざるを得ない、之れア何うしても即日返事を出さなければ先方の親切に對して濟まない直様先帝陛下の銀婚式記念切手だの現帝陛下の御慶事記念切手だの其他現行の切手なんか十數枚寄集めて扱て善い加減な申譯や何かの文句を並べ立てて下手な返書は出来上つたものゝ愈々投函したのは確か四五日後の事であつたと思ふ

▲夫れでも記者はマア之れで善かつたどホツと胸なで下した、夫れから更に此次ぎはモツト緩り蒐めて二百五十枚に對する御禮をしなければなるまいと丁度天長節祝日當日を以て發行せられる新切手などの事を氣にして居る中に十一月初旬第二回目の書信に接した

▲其文面に依るとナ君は記者の郵書が届いた翌日發信したものらしい「御手紙

誠に有難く實は寫眞を送る積りなれど持合せがないから其内寫して差上げる。夫れから埃國や獨乙の切手も持つてゐるが御望みなら送らう序に君の新聞を二枚郵送して呉れ給へ云々」と言ふ様などを書いてある

▲之れに對し記者は何所の切手でも構はないから種類の異つたのなら幾らでも送つて寄越せと云ふ事を本文に其他社主催の學生徒歩競走があつたとか九州南西岸で海軍演習がある筈だとか段々冬になるけれど一向寒くならないとか云ふ様な事を取交せて返事を出して置いたが新聞を送るとはスツカリ忘れて仕舞た

▲第三回目の書信が十二月十七日に届いた、こちらの要求通り、埃國、獨乙、白耳義、伊太利、丁抹、英國、米國及御手元の露國の切手無慮二十七種四十二枚を封入してある、數に於て前便に劣つて居るけれど種類に於て遙かに勝つて居るから前回の二百五十枚よりズツト今度のが鶴しかつた

▲ろして結尾に「ポルトガル及 그리스ランドの友人も切手を送る事を約束して呉れた、届いたら直ぐ君に送るべし、尙君の新聞を御送り下さらば幸甚なり」と書いてある、新聞の事はスツカリ忘れて居た、其所で大急ぎで串木野線開通記念號や其他二三日分一纏めにして發送した、日本人同志なら二度三度催促されても一向平氣で感々も何もないのだがナ君に對しては妙に氣がひけて記者は再び「新聞を御送り下さらば幸甚なり」との一句を見て頗る狼狽したのである

▲夫れから僅かに五日間を置いて第四回目なる葉書に添へて一封の書留郵便物が配達された、葉書は氣にならないが書留は何だらう、ヒヨツとしたら金の四五千圓も送つて之れでロシアに遊びに來いと勸めて來たのぢやないかと開封して見たら中から六枚の風景繪葉書が現はれた、昨日及本日の記事に添へてあるのが即ち夫れである

▲切手を送る繪ハガキを送る、誠に以て親切な事である、然し繪葉書六枚を送るに書留でやるとは如何にもロシア式だ、或は關稅か何かの關係があるのかも知れないが日本人たる記者はどうしてもナ君の意中が十分に讀めない

▲書留問題の意中は十分に讀めないがナ君の一舉一動を通してスラブ民族記者が好愛するの胸中に鬱然たる彼のロシア魂は十分に讀めて居る、十年前極東滿洲の野に戰敗の耻辱を與へられし渠等露人の今日より我々は學ぶべく狂省すべき何物かを認め得ないならば我日本帝國の前途は甚だ危ないものと言はねばならぬ

(大正三年拾二月)

牧 曉村

柿をもけば赤くられたる實が減りてさびしくなるにやめてなかしむ

琉球のいろく

本項は大正三年一月沖繩に於ける第六師團連合演習後、軍後前後三十回に亘り鹿兒島新聞紙上に連載したる「琉球雜俎」の中より特に全地方の風俗に關する數項を採録したるものなり

一

沖繩婦人は一切の品物は何でも彼でも之を頭上に載せて決して兩手或は肩を使用しない習慣がある、偶々頭に戴せない場合は俥に乗るか何うかする時で兩手或は肩を絶対に使用しない様である、其の品物を戴せる具合は色々あるが大抵は布或は藁等で拵へた圓輪を頭上に嵌め其上に徑三尺位の摺鉢狀の竹籠を載せ其中に反物でも果物でも茶碗でも徳利でも牛肉でも豚肉でも魚でも何でも彼

でも有りど有ゆる品物を投込んで両手は少しく裾廣にダラリと下げたまゝ恰も幽霊の足取り宜しく静かに大道を裸足で歩いて行く所は一寸奇観である、而て其の洗濯桶、砂糖空樽、水瓶等を戴込んでチョイと片手で支へた儘脇目も振らずに済し込んでヒューと擦れ合ふ時などは思はずヒヤリとさせる、尙手を使用しない極端な實例は途中で友達同志が出逢つて

「アラ貴女何んな品を買つて、一寸見せて下さいな」

と来た場合も、我々の考へでは一寸兩手で頭上の竹籠を卸した方が便利と思はれるが決して手は掛ない、片足を曲げて陸軍の折敷け宜しく身長を短縮する事に依つて友達の覗き得る方法を選んでゐる、如何にも苦しい危ない藝當で馴れない人は見た丈けでハラ／＼する、之が豚市場の邊に行くと更に面白い、賣りに行く人も買ひに行く人も大抵女が多いが之が胴廻り一尺五寸長一尺位の

仔豚を二頭乃至二頭宛丸で小包か米俵の様に無茶苦茶に藁や縄なで縛上げろいつをチョイと頭に戴せ之がピー／＼無暗に啼立てるのなんかトント御構ひなしにサツサと行つて仕舞ふ所なんか只モウ呆れて後見送る計りである此の物を頭に戴せる習慣は沖繩人に對して種々の影響を與へて居るだらうが記者は其の主要なる一利三害を認めて居る、先づ利益の方は勢ひ婦人の体格が真直ぐになつて来る事である、之は運動會に於て戴囊競争の實驗に依つても明白であるが何か頭に物を戴せてゐる以上決して体を前後左右何れへも屈曲の出来るものぢやない、必ずや直立して居なければならぬ、従つて沖繩婦人の体格は揃つて真直ぐになつて姿勢が善く内地人の目から見れば稍反身になつて外八の字を踏んで歩く結果になつて居る、次に害悪の方を申上げると第一全体の行動が活潑を欠き遲鈍になつて来る、チト失敬な言分かも知ないが一体に沖繩人

は動作が遅鈍だと言ふ評判があるが記者も確かに之れを認めてゐる、其の原因は多分氣候の關係だらうと思ふが一面確かに頭に物を載せる習慣からも來て居る、即母の性が子に遺傳するのだ、第二に沖繩婦人は(男子も)概して身長が短かい、之れも上記の習慣が影響して居るに違ひない、第三に沖繩婦人は實に綺麗な漆黒の髪を持つて居るが惜しい哉殆んど総ての婦人が髪を生際が悪い、何だか斯う妙に額が禿げ上つて叩切れた様になつて切角の美貌を臺無しにして居る、之も確かに頭に箝める布或は黄製の丸環が影響して居るのだ要するに頭に物を載せる習慣は小にしては沖繩人の發育を害し大にしては沖繩縣産業の發達を妨げて居る、沖繩縣民に自覺と言ふものがあるならば斷然此の悪習を廢すべしだ、而て手及び肩の使用を練習し今時に丁稚車大八車等の使用を奨勵しなくては不可ない、でなければ沖繩縣は如何に焦つた所で水平線以下

に取殘されるより外に仕方はないので

二

沖繩と言ふ所は極く狭い所で人口も僅かに五十万そこゝの所だから此の半數を女として婦人の研究位は朝飯前の仕事だと思つて居たが實際は却々さう安々と行かなかつた、沖繩位の婦人の階級と及び地方に依つて各個特殊の風習、性情相錯綜した所は殆ど他に其の例を見ないのである、記者實は今だに十分沖繩婦人を了解する事が出來ぬので自分ながら腑甲斐なく思つて居る所だが思へば思ふ程不可解なのは沖繩の婦人である

單に婦人と言つても種々の區別階級がある、奥さんあり御嬢さんあり下女あり藝者あり酌婦あり娼妓もある、然し之等の總ての階級を通つて第一何人の目に

も異様に感ずるのは其の服装である。上流深窓の婦人は知らないが中以下の所では例の琉球縞、或は緋地の着物で袖は何れも肩口も袖口も同ト大ききの筒袖になつてゐる、ソイツを如何にも無難作に着流して襟も左胸やら右胸やら區々だが一寸横腹の所で襟下を捻り込んだ儘帯も何も締めて居ない、夫れから之れは何も記者が實地に前を捲つて検めた譯ぢやないが人の話を聞くに沖繩婦人には腰巻と言ふものがないさうだ、此所に持つて来て少し強い風でも吹いて來たら夫れころ十二日の大地震當時入浴中の某夫人以上の壯觀を演出する譯だが其所は又夫々防禦工事は遺憾なく施されて内地の猿股が案出されてゐる、但し之れには紐が全然ない、矢張り一寸捻り込んである丈けで至極薄弱なものであるが夫れでも一ト通りの効力はある譯だ

聞けば沖繩では近時婦人の服装問題が八釜ましく論議せられる様になつて來た

さうだが之れ元より當然の事である、或は昔の古雅な優長な所もあるだらう自然の点もあるだらうが何うもあの服装ぢや話にも何にもなつたものぢやない、第一總ての恰好が間が抜けてチツトも確かりした所がない、そして如何にも肉感的だ、誘惑的だ、遊惰的だ、余輩は之れでも不粹漢と秘かに自ら信じて居るのであるが夫れでも沖繩婦人の服装を一見しては「男の衆何方でも入らつしやい」と言はん計りに見へてならなかつた、近來娼妓、酌婦間に白縮緬のシゴキを前結びに締める事が流行してゐるが之も羽織でも引掛けた時は兎も角、只着物丈けの場合は胴を締める爲め其の脂肪分に富める腹部から臀部及太股の肉のふくらみが見へてからに風紀上甚だ面白からぬ結果を來す事になる、殊に將來沖繩も漸次國家的に發展の域に向つて進まんとする際服装問題の解決は極めて急務と言はねばならぬ

然らば如何にして解決するのか、之は仲々困難な問題で其方法等も種々あらうが元來沖繩の家庭では母の権力が非常に強いさうである、即ち此の母達から解決してゆくのは之れ又一種の方法である、でなければ學校でドレ丈け八釜敷く言つた所で一度び家庭に入れば何の効力もない事になる、氣候や其他特殊の干係ある沖繩に内地其儘の服装を持つて行くの無理なるは記者も知つて居が、だと言つて此儘に放つて置く事は甚だ宜しくない、兎に角沖繩に適當する様に然るべく服装の改良されんとは吾人の切に望む所である

三

眞正の婦人美(男性美でも)は第一其の健康にあるは申迄もないが此外に婦人美を補助するものが澤山ある。音聲もさうだ、化粧もさうだ、服装もさうだ、少

し通人になると光線或は配景を巧みに利用して婦人美を助成する事を怠らない、其の中で最も重要なものは何と言つても頭髪であるとは何人も否む事は出来まい、婦人が頭髪を大事がるのは我々男子から見れば實に可笑しい位で出て入つても髪は寸時も念頭を去らないのである、其所で掏摸なんか婦人の懐中物を狙ふ時は先づ一寸洋傘なんかでその髪をコックのた、うして其の注意が全く髪の方に移つた虚に乗トて旨々と仕事をやつて退ける、又化粧所、衣類着所、帯締め所と言ふのが無いに拘はらず髪結所と言ふのは到る所にある、妻が夫に死別れた時髪を切る、女の不貞を怒つての立廻りなんかには能く髪切り等をやる、之等は即ち髪と言ふものが如何に婦人に取つて大切なものであるかを語つて居るのだ

夫れから我國古來の風俗史を見ても結髪と言ふ事は極めて重要な地位を占めて

る、而て現在行はれて居る結方でも兵庫髷系では唐人髷、三つ輪、お煙草盆、丸髷系ではふき輪、下げ地、片はづし、島田髷系では島田くづし、毛巻嶋田、やつし島田、なげ島田、文金島田、銀杏返し系では天神、ふくら雀、桃割れ等を始め近頃は束髪からローマであれのマガレットであれのやれ八千代巻、百合子巻、女優巻、S巻、渦巻形、何巻、彼巻と仲々一日や二日では數へ切れない位に種類が多い、然らば何故ろんなに素張らしい種類が出来たのか？申すまでもない斯く無数の種類を生み出す位に女が髪を氣にし大事にして居るからだ、昔から髪は女の生命とまで言はれて居るが全く其の通りである、髪の結方（中にも鬢の掻き方）次第で顔の長短廣狹を如何様にも補ふて見せるのは實に驚く程である

沖繩婦人は前にも言つた通り實に美しい頭髪を持つて居る、漆黒の艶の美しい

房々とした髪が頭に餘る様な所を見ると實に惡らしい位の美しさである、斯迄に美しい髪を持つてゐるのに只一種例の琉球巻以外に何等結髪美無しと言ふ事は驚く可き現象と言はなければならぬ、沖繩婦人の結髪位無雑作、單調、無趣味なもの甚だしい、近來高等女學校其他の女學生が一寸束髪に結つて居るが夫れでも家庭に歸れば直ぐ例の琉球巻に早變りする、一体に沖繩婦人は愛髪の觀念に乏しい、或は全く無いのかも知れない、頭上に物を戴せる習慣は其の例證ぢやないか、苟も髪を愛する念があるなら指一本觸るゝ事すら氣にする筈だ、證例は之れに止らない、沖繩婦人の髪は僅かに一本の竹或は銀製（すつと上流になると黄金）の釘を以て束ねてある計りで櫛、簪、笄、手がら、リボン等の裝飾物は全く無いのである、只モウ呆れる位に簡單を極めてゐる尤も之は一面から言へば質素と言ふ美風で賞讃すべき習慣とも言へるが全時に

又非文明的、非社交的とも言へる、吾人敢て華美を誘發しやうとは毛頭思はな
 いが居常質素を旨とすべき軍人さへ金モール燦然たる大禮服の制定があるぢや
 ないか、殊に文明と社交は相比例して進んで行く、沖繩婦人なるもの少しく現
 代の時勢と自己の地位とに省みて多少社交的方面の扮装と言ふ事にも心を傾け
 ざる可からずだ

四

地方及離島の事は知らないが首里、那覇兩區の婦人一般には貞淑と言ふ美はし
 くも床しい美點を持てゐる、元來沖繩は其の昔建國創造の際に女計りであつた
 と言ふ傳説がある位、又俗に女護島と呼ばれてゐる位女に依つて名高い土地
 である、夫れだのに少くとも首里、那覇の一角に斯く貞淑の美風あるは異とす

べきである

沖繩には縣立高等女學校、那覇女子技藝學校、首里區立及島尻郡立女子徒弟學
 校の四校があり四校惣計七百の在學者がある、而て女學校の如きは明治四十年
 の創立に係るものなるも今日迄如何はしい風評は未だ嘗て漏れないのである、
 女子の十七八九と言へば「鬼も十八ばん茶も出ばな」と言はれる通り青春の血は
 燃へてともすれば冷かな理性を失つて盲目的な振舞に走り易き時代である、現
 在内地の各所では殆ど言ふに忍びず聞くに堪へざる醜聞を流し識者の眉を擡め
 しむるものある有様だ、然るに沖繩の女學生間には決して此種の醜聞が無い、
 中に只一度一寸問題になつた生徒が出たさうだが之は内地人の娘であつたさう
 である、兎に角沖繩の女學校始まつて以來六七年にもなるが其間僅かに只一人
 の不品行者を出したるに過ぎない、而も夫れが沖繩縣民には頗る異様の感を惹

起せしめて上下等しく驚異の眼を瞠つたと言ふ。單に娘社會の品行が斯く嚴重なるのみならず其他一般婦人社會の操行も極めて正しいものである、沖繩婦人は夫に死別しても決して再縁しない、何所までも寡婦として立派に獨力を以て遺児を養育して行くのは感心である、尤もこれには種々の原因もあらうが一般に婦人の再縁するのは子供の無い人も有る人も自己の生活問題が密接の關係がある、若し婦人の自活と言ふものが容易であつたら強ひて再婚する婦人は尠からう、所が沖繩婦人は一体に極めて勤勉である、一家の生計費の大部分は實に婦人の手に依つて得られるのである、換言すれば沖繩では婦人の自活が容易である、氣六ヶ敷い我儘な男の尻にクツ附いて居なくても格別生活に困る様なことはないのだ、夫れから一体に沖繩婦人の愛情は極めて濃厚熱烈なものであるさうな、即ち男思ひだ夫思ひだ、此の二原因に貞淑

と言ふ美風が加はつて再婚が絶無となつて來るのぢやないかと思はれる。要するに勤勉と貞淑は沖繩婦人の誇るべき美點である、此の二個の美風は將來何所までも保存して行き度いものである、茲に於て記者は先づ沖繩の女學生諸姉に一言を呈し度い、申すまでもなく諸姉は之から學校を卒業し行々は母として社會の上層に立つ可き前途を有してゐる、諸姉の一舉一動は即ち沖繩婦人全體の一舉一動となるのだ、勤勉と貞淑の美風を保持し行くも破壊し去るも一に諸姉の覺悟次第である、頃來識者間に八釜敷き婦人問題の解決さるゝと否とも亦諸姉の意氣一ツに依つて定まるのである、諸姉の優しく纖弱き双肩には實に全沖繩婦人と言ふ重荷を負てゐる、婦人問題を解決するのは知事でもない、區長でもない、警察署長でもない、校長でもない、全く女學生諸姉の責任であり且つ義務である、記者は諸姉が各其の地位と責任を自覺して眞面目に婦人界

に立つて健闘されんとを沖繩將來の爲に切に希望して止まない

五

糸満町は沖繩縣只一の町で戸數一千六百人口七千七百餘那覇を南に距る二里二
十七町、沖繩本島では最南端に近き支那海に面した海岸にある、一体沖繩では
一般に漁業を賤業と心得て誰しも好んで従事する人はなかつたが糸満のみは古
來より盛んに漁業を営み今でも那覇に供給される漁類の殆ど全部は糸満漁民の
勞に待つ所である、此一事を以てしても糸満町は一種異つた習慣の土地である
が此外に尙種々の奇習が多い、中には一寸言ひ悪い様な點もあるが兎に角之も
一種の風俗史として以下順次紹介しやう

糸満の漁業は晝間もやらの事はないが多くは夜間が多い、即ち夜間の方が漁獲

が多くて比較的仕事がやり易いのである、其所で當然の結果として男子は晝間
家庭にありて夜間を海上に過す事になる、斯んな習慣であれば夫婦の間柄で悠
りと談話を交へる機會は殆どない譯だが此所が即ち奇習で第一家屋の建築法か
ら異なり各戸必ず「夫婦の外入るべからず」と掟されたる一室を設けてある、而
て玄関或は勝手口に箒を立て掛けてあるのは「御話中」の信號で此場合は一寸
要があつても決して御免なさいと言はない事になつてゐる、成程甚だ面白い習
慣だが之を内地に輸入したら差當り借金持ちなどには此上もなく便利だらう
次は糸満では夫婦全く經濟を別にして居る奇習がある、夫婦でありながら各別
々に經濟上獨立して生活して居るのだ、夫は自分で自分の生活費を儲け決して
妻を助けないが又妻に助けられもしない、妻も亦自分で働いて決して夫の補助
を仰がない、多くの人々は之を個人主義々々々々と言つてゐるがインヂビヂユ

アリズムの意味は暫く措いてなるほど立派な個人主義である、然し御話中の揚句一旦子供が出来たら茲に始めて財産併合を斷行して協力一致子供の教育に努むるさうだ、流石賢明なる糸満人も夫婦間に出来た子供が夫婦何れの責任に歸すべきかは遂に究明し得なかつたと見へる

又糸満は割合に料理屋の多い土地である白銀樓、吟月等十數軒の宏壯なる料理屋が嚴然として城廓の様に珊瑚礁岩の上に立つてゐる、申迄もなく附物の女も亦頗る多いが如何に所變れは品變るとは言ひながら此地方の料理屋女が海老茶袴を着けてゐるのには驚いた、記者は演習當時之を目標して多分那覇へ遊學中の女學生が歸省したのだらうと思つたが料理屋女だと聞いて大に呆れた、但し居常何時も海老茶袴で居る譯ぢやなくて何か特に地方の書入日なんかには外出する際に限つて用ふるものなるは申迄もない、之を要するに糸満は浮靡な土地

である漁業に於て徹底し個人主義に於て徹底し且肉に於て徹底して居る、漁業及個人主義の徹底は問題にはならないが肉の徹底は少く考へ物だ、若し此の監視矯正が困難ならばせめて衛生的方面に法意して貰ひ度いものだ、花柳病の歩合は最も沖繩壯丁に多いと言ふとは決して誇るべき事實ぢやない

六

宜野灣は那覇の北方約三里を距る村の名で中頭郡中の摸範村だと聞いた、此村は郡部での演習最終地で「明日は愈々那覇に歸るのだ」と言ふ氣もあるし一寸悠りした氣になつて全地名物の闘牛などを觀覽し其夜は全地方有志の宅に宿を取つて貰ひ郡衙、役場、學校等から非常の歡待を受け淋しいながら心易い一夜を明した

扱て翌日は少々寝過して九時頃起床した、ろして汚ない話だがノコノコ下りて行つて表の庭先にシャア／＼小便を射くつた、随分乱暴なやり方だと思召す方があるかも知れないが決してさうぢやない、一体沖繩の民家には特に便所の設備がない、だから小便は元關であらうと往來であらうと何所へでも垂れ捨てとなつて居る、ドウも具合が悪ければも習慣で仕方がないのだ

夫れから顔丈は洗はして貰つて村役場で特に用意して頂いた朝食を済ますと今度は少し御念の入つた大便を催して來た、全業九州日々の植山天水子を捉へて

「便所は何所な？」

と聞くと天水子其の愛嬌に富める細い目を向けて

「便所は無か」

と薄笑ひをして澄し切つてゐる、便所は無かぢや困る、此の尻模様ではトテも三里からゐる那覇まで持ち堪へる事は六ヶ敷い、ドウしても此所で決行して置かねば途中が危険だ

「君は何所へやつたな」

「其所ん先きの畑の中にやつた」

其の指す方を見れば直ぐ裏庭に續いた芋畑がある、ろして其の直ぐ後ろは村の通路になつてゐて而も何等の防遮物もないのだから之が夜中か或はせめて早朝頭なら兎も角、彼是十時近い白日の下に於て公々然と尻を捲るのは實以て容易ならぬ大問題である、流石の記者も之には大に尻込みして頗る當惑したが其中尻模様は容捨なく險惡になつて來る、何うにも斯うにも仕様がなないので僕は遂に一生一代の大決心をした、記者は行きなり立上つて下駄をつツかけた、ろし

て妙な腰付きで直ぐ庭先きの芋畑の中に踞がんで尻を捲つたのだが、記者今日まで随分色んな目に遭つて来たが何うも之れ位苦しい思をした事は生來始めてあつた、殊に沖繩では便を垂れた後から直ぐ豚が来て難有く頂戴すると言ふ話を聞いてゐるのでウツカリ前面丈け警戒してゐる間に尻の所をペロリとやらればせぬかと気が氣でない、記者は殆ど一秒置き位に頭部を半廻轉して絶へず前後を警戒して戦々競々の裡に辛ふトて用便を終つたが當時の氣拙さ物足らなさは今以て忘却する事は出来ない

七

那覇の北西隅に「辻」と言ふ一廓がある、先づ内地の遊廓と思へば大差ないが而も内地に見られない種々な奇習が多く確かに沖繩の一名物なるを失はない

辻を單に遊廓と言ふのは間違ひである、無論遊廓ではあるが全時に飲食店、料理屋である、然し遊廓に料理屋を兼ねたるを辻と言ふのでなく遊廓と料理屋を營業する所が辻で、之れ即ち内地の遊廓と異なる點である、而て辻の一廓は琉球特色の石垣を以て戸々頗る嚴重に圍繞され殆ど息詰まる様な氣持を起させるが建物も大部琉球式で甚だ振はない、然し中には立派な三層樓など全盛を誇るが様に道側に聳へて居るが此の一廓の貸座敷數四百十六軒(或四百七十一軒)とは人口五万三千の那覇に對し驚くべき多數と言はねはならぬ、即ち那覇區の總戸數一万六百三十三戸の約四分は貸座敷である、之を鹿児島市の戸數一万三千二百に對し僅々二十二軒の貸座敷あるに對して見ると或程沖繩の名所丈けあると首肯させるものがある、次にアングワ、即娼妓數如何と言ふ問題になるが表面に現れた所では八百八十五人となつて居る、此外に酌婦と言ふのが二百幾ら

都合一千二百内外になるが然し之でも一戸平均僅かに三人に過ぎない、之も甚だ不思議千万である、記者は沖繩滞留中幸にして沖繩毎日の城間恒加、琉球新報の渡口政成兩君等の東道に依り一種の秘密境「辻」の内部を參觀するの光榮を得た、而て記者の目撃したる所に依れば一戸少くとも十名位の婦女がウヨ／＼して居た、ズット大きい家には二十人以上の有力なる娘子軍が駐屯して居るに違いない、假に一戸十人平均として總數四千六百六十名(或は四千七百十名)となる、大々の讓歩して五人平均としても尙二千餘人の女が扮装を凝してデレ助を待つて居る譯だ、如何に古から女護島と呼ばれて居る所柄とは言へ其の素張らしさには恐入る

一体沖繩に於ける辻の隆盛は果して何に起因するだらう、先づ人口から研究して見るも沖繩は五十三万九百五十七人で内女二十七万三千廿七人男二十六万六

百二十人となり九千七百七十七人丈け女が多い又鹿児島縣は百三十六万八千五百三十三人中女六十九万六千二十四人男六十七万二千四百七十九人で女の方が二万三千五百四十五人丈け多い、之れで見ると沖繩丈け特に女が多過ぎると言ふ事は云はれない只沖繩人の天性、風習、嗜好が先天的に斯様な趣味道樂を好愛するのぢやなからうか、則ち如何なる商品と雖必ずや需用と比例して盛衰するは申迄もない、需用があり始めて生産も増進するのだ、「辻」も雖此の法則に逆いて盛衰し得べき筈がない、斯うなると「辻」の隆盛は一面に沖繩人の耻辱である、大恥辱である、聞く所に依れば其筋は深く此の弊風を慨し「辻」の制限策、移轉問題等に就て研究調査中だと言ふが記者の見る所では「辻」問題を解決するものは警察部警察署に非ずして寧ろ沖繩人其者の頭である、此の頭から改良して行かなければ「辻」問題は永久に解さざる謎として残されるのみであらう

辻遊廓四百幾十軒の何所を探したつて男一人探す事は出来ない、一家の主たるものは即ち女で琉語でアンマーと稱へて居る、而てアンマーの配下に五人二十人の女が各自一室を領有して居るとは内地の夫れと同トであるが而も其の解放的非束縛的なるは殆ど驚く許りで内地の娼妓が之を聞いたら嘸かし其の自由が羨望に堪へないだらう、辻では兎に角一ヶ月五圓なり十圓なり一定の金をアンマーの手に差出しさへしたら夫れ以上何等の責任も義務もない、部屋に遊んで暮さうと男を引入れて自腹を切つて巫山けやうと、夫れは全く御當人の自由である、之れも確かに奇習の一つだ、夫れから沖繩の女郎屋には掛行燈もなければ仲居も居ない玄關は何時にも嚴重に鎖されて容易に人の入るを許さない

、顔見世の爲め店を張る様な事は勿論無い、一体沖繩の女郎屋は初回の家に一人で行つたつて滅多に這入られないさうだ、誰か知つた人の案内か紹介が無い以上例へ眼の前に黄金の百兩千兩積立てた所で上られない相だ、之で見ると如何にも金に綺麗な禮の國だと感心せざるを得ないが然し十が十までさう計りだとは言へない、近來は餘程氣が利いて來て金さへ取ればと言ふ性根の家も大分増へて行く相だ、然し大体から言へば紹介無しには行かれない習慣で之れも奇習の一に數へられる、而て自分の女の家に通つて行つたら先づ其の嚴重に鎖されたる扉をコツ／＼と叩いて來意を通トなければならぬ、すると鋭敏なる哨兵イヤ哨女は直ちに之を聞きつけて

「ターヤミセーカー(誰方ですか)」
と誰何する、然し自分の情夫は下駄の音、扉の叩き具合でチャーンと分るさう

だからエライ、そして愈よ何誰と言ふ事が分ると茲に始めて

「イリミソーレー(御這入りなさら)」

と門を外して扉を開けて呉れる、只扉を叩いた丈けぢや仲々入られないのである、之れで見ると沖繩の女郎買いは甚だ手数の要る事であるが之等も奇習の一ツに數へられる

ろれから辻の女は決して酒を飲まない、偶々客から盃を戴いても一寸飲ける眞似をして膳の隅に捨て、決して咽喉には通さない。之れは沖繩の黒人素人に通つた風習で頗る奇異の感ありだが素人にしては此上もなき美風だが黒人として如何にも野暮ぢやないか

其他此の廓の中に於ける音曲、歌舞等に就ても色々珍らしい點が多い、先づ樂器としては支那福州方面を経て移入する蛇の皮で張つた所謂蛇味線と琴と胡弓

の三種で稀には太鼓を用ふともある、總トて一体の音調が極めて沈鬱的哀愁的亡國的中にも蛇味線のボン／＼と濕つばい恰も地の底の冥府からでも響いて來る様な音律は薄氣味悪い位である、之に連れて唄ふ歌も陽氣なのは少ない、大抵は哀れな愁はしい悲しい様な歌である、次に踊りであるが之は大抵八歳か十歳位の小娘が踊るのだが種類の變る毎に全然服装を更へるのは頗る妙で一寸面白い、而して技巧的藝術的に言へば極めて單調無趣味拙劣なものだ、總てが直線的で曲線的の優美さは何所にも認められぬ、只踊りの變る毎に種々の古典的原始的な服装を取代へ取代へ現はれるので此の服装の變化に依つて辛ふトて不充分ながら嫌意を制して居る、然し劇場などで演ずる踊りには中々優美な踊りがあつて記者は非常の感興を催し「是非之を内地でやらして見度い」とまで思つた、大坂毎日の小説から出來た百合子劇に現はれる「識名園交遊踊」なんか

其の一例で之は内地では非常の喝采を博したのである、但し断つて置くが記者は歌舞音曲に關しては全くの素人で御耻しいながらサノサ節さへ満足に歌へない腕前イヤ口前の男である

九

辻遊廓四千の娘子軍は如何にして編成されしか、之れは仲々興味ある問題である、何時の時代から始まつて如何にして斯くも不思議な一廓が出来たのだらう、其の起原等に就ては種々の説もあるが要するに那覇に寄港する船舶と密接な關係があつたのは殆ど疑ふの餘地がない、未だ交通も自由でない往昔にありては國外からの船舶は非常に物珍らしかつたに違ない、沖繩の女は擧つて之を歡迎し一日でも永く引止めて異郷の物珍らしい談話を聞かんと欲したのであらう、

此の習慣が次第に積り重なつて遂に今日の様な奇怪千万な女護嶋の一廓を現出したのぢやなからうか、兎に角辻遊廓起原の詮議立ては何うでも善い其所に巢喰へる無慮四千の女は何所から来て何所に行くのだらう？之れ何人も知らんと欲する所に違ない、手ヲ取り早く言へば沖繩では立派な人身賣買が行はれてゐるのだ、尤も人身賣買と言つても意味の取り様ぢや丁稚、番頭、社員、官吏から下女下男酌婦、藝妓、娼妓に至るまで皆一種の人身賣買と言へる、殊に後者の如きは最も其の色彩が明かなものだ、然し之等は内實は兎も角第一本人の承諾を得て居る、然るに沖繩に於けるのは形式は兎も角、内實は全く本人の承諾も何もないのをバシク賣飛ばし買集めるのだから立派な人身賣買である、内地の娼妓は満十八歳以上どか年齢に規定がある筈だと思ふが沖繩では間には十七八になつてから連れて來るのもあるが大抵は七八才の子供の時分から恐

るべき獄「辻」の女郎屋深く連込んで仕舞ふのだ、而て辻に於て宴席に侍し琉歌に連れて踊るのは皆な此の八九才十一二位の小娘で一才内地の舞子格になつてゐる、之等の小娘達が何事も自分の身の上になつては知らない氣安い顔して色々眼もあやなる踊衣裳や頭飾り(一種の扇形の)等を着け、五彩の花扇を使ふ手振り面白く何時までも何時までも踊り續ける其の、無心な顔ざしを見るとドウも變な暗い氣に引入れられて娘達の行く末が哀れに思はれてならない其所で之等の小娘達は如何なる手段順序に依り又幾許の金に買はれ此所まで連れて來られるのだらう、記者は之を沖繩の或有志に聞いて見たが何うも夫れは分らないさうだ、知つて居て言はれなかつたのかも知れないが記者は斯く信くない、全く分らないのだと信する、何故なれば其の手段方法等が判つて居れば斯かる非人道的の所業に對して當局者が何等かの取締りを勵行しない理由はな

い筈だ

然し時勢は到底沖繩を今日の如き状態に放任することを容許するものぢやない、此の戦慄すべき人身賣買に對する相當取締りは沖繩縣の名譽の爲め且又人道の爲め早晚何等かの形式に依つて現はれなければならぬ問題である矣

牧 曉 村

さびし男石うちかたげ地になげ砂を浴びつゝかなしみにけり

下り立てば雨上りの庭若生ひて白粉の花散れるがさびし

二十日ぶり手づから洗ひしシャツの着こぢのよさ汚したくなし

小 川 蘆 葉

ひざまずく運命しらすも今日よりは奮ひたゝなむ處女たふとし
曉の夢おもひでこの惱み煙と消ゆるわれ愚かしさ

小供の頃

小供の頃と言へば彼是二十年も昔の事である、僕の現在の性分——五分前に言つた事もケロリと忘れて仕舞ふ様な——から推断する時は二十年前の事などは夢にも記憶してゐるべき理由は無さ相なものだに不思議にも今日まで臍氣ながら頭に残つて居るから面白いぢやないか、而て僕はこんな思出を無上の愉快事とし時としては夜も終らまじりともせず懐かしき追懐に耽つて飽き果てない事なともある。

こんな調子で書きだして見ると其の追懐たるやどんな美しい詩的なものだらうと未だ聞かぬ先から待ち焦れてゐる人もあらうが事實は仲々ろんな生優しい事ぢやない、何れも汚ない變てこな事計りである、土臺詩の五の歌の豚のと言

ふ頭は御預けして生れて来た人間なんだから

扱て追懐の回想のと言つた所で元より七ツ八ツ時代の事だから、ハツキリとは覺へて居ないが俗にヤンメと稱する眼病を患つた人で患者自身の小便を茶碗に垂れ夫れで眼を洗ひ療治して居たものを記憶してゐる、小便で眼を洗つて夫れが治るか何うか善く知らないが夫れを實行する人があつた事實から想像するに夫れで治つた前例はあつたに違ひない、前例があつてこそ夫れに倣ふものが出来た筈だ、ヤンメとは僕察するに脂眼に違ひあるまい、醫學上何と言ふの知らないが之が自分の小便で治るとあれば之れ位便利な事はない、金は一文も要らないんだからなア、然し近年になつて小便で眼を洗ふ人が絶へて無い所から考へるに格別の効能が現はれなかつた証據だらう、殊に痲病持ちの人なんか盲目になる覺悟で洗はなければなるまいが

野外で怪我をした時には善く蓬の葉を揉んで傷口に付けて置くど何時の間にか治るものだった、之は現時でも田舎の農夫などが時々實行して居るので見れば相當の効果があるらしくも思はれる、而も夫れが只蓬丈けを揉むのなら兎も角、泥手に持つて来てベツと掌一杯に唾を吐出して一緒に揉合すのだから如何にも痛快だ、夫れでも綺麗に治つて無事に生長して来て居るから不思議なものさ

天氣の好い日なんか善く木戸の邊で乾いた小砂を搔寄せて遊んだ、ろいつを出来る丈け高く積立てると其所に圓錐形の小丘が出来、次に脇で以て小丘の頂邊をトンと突くと小さい窪みが出来、此所に至つて快心の笑みを洩し前を捲つて其の窪みに小便を垂れるのだ、時に依ると三人も五人も續いて次ぎ々に注ぎ込む、稀には女の遊び仲間までがシャキ〜やるのだから愈以て凄ま

しい、之が終ると濕氣を含んだ砂丈けは固まつて仕舞ふ、僕等は此の小便で固めた砂の小塊を拾上げて其の大小を競つて興がつたものだ、ろして終いには之も揉潰して家に歸るや其手に握飯を強請つてムシャ〜やりをつた、こんな時の握飯の美味しさは今だに忘れられない、少々蒸氣があつて小砂がシャキ〜して居た様だけれど………

母親や子守などの不注意から自分の小便を嘗めたり糞を喰つたりする例は今も昔も變りはないが僕の想像では自分の小便糞所ぢやない犬猫や馬牛の糞までも喰つて育つた人間は随分あるだらうと思ふ、田舎邊に行くど子守同志は石などの遊びに夢中になつて小供は五間も十間も離れた草原を匍ひ廻つて居る有様だらう、元來子供は何でも彼でも手に觸れた一切は総て之を口に運び味なんかで御構ひなしと來てゐる、猫の糞位は珍味として歓迎したに違ひない、今頃

の若い男女が接吻だの何だのと大騒ぎをするがこんな事を考へたら、キスも鯖もあつたものぢやあるまいが………
(大正三年四月十九日)

小川 蘆 葉

野に咲ける小さき花にろもがばや温き涙の捨てどころなし
奇術師の赤き顔にもしら／＼と映ゆる舞臺のなか／＼みぢあり

牧 曉 村

昨日もちし重き石ゆえ痛みたる肩筋なでと悔ゆる朝かな
母と居て大豆畑に拭ふ汗眞玉ともならず風の暑かり
人一人前の仕事はしうべしとわが旅に行くと云ふを悲まぬ母

虎 列 刺 追 出 し

曲りなりにも世の中の雑事は兎も角理解の出来る様になつた今日の立場から考へて見れば随分馬鹿氣た事の極みであるが其當時は全く眞面目になつてろんな事をやつて來たのだから可笑しいぢやないか

虎列刺追出しとは思切つて奇妙な名稱だが其のやり方が又頗る振つてゐる、僕等は此の奇妙なコロイウメン業を六七才から八九才或は十二三才の頃まで無報酬を以て事神妙に遂行して來たのである

コロイウメンをやるのは大抵夏期即ち虎列刺がポツ／＼流行し始める頃で確かとは記憶して居ないが凡そ一週間位繼續して行き居つたと思ふが其の時刻も毎夕方太陽の入り時分で朝或は日中に行ふ事は絶対にないのだ、ろして之を行

る人も全部五六才から十二三歳迄の子供衆に限られて居た。夕方になれば別に誰が命ずるともなく部落の鼻垂れ小僧、腕白小僧連は色んな遊びから引揚げて自然と餓鬼大將の門前附近に集合して来る、手には必ず普通の板片れや、破れ鍋、ブリツキ罐、石油罐等と外に之を叩く一本の棒切れを用意して居るが手ふらで居てはコロイウダシを行る資格がないのだ、斯くて一同勢揃ひが出来ると餓鬼大將の指揮命令で一齊に板片れ、破れ鍋、ブリツキ罐、石油罐等を例の棒切れを以て叩き始める、之と同時に一度にヤアと関の聲を擧げて順路部落はづれに向つて行進を開始する、何しろ十數名の腕白小僧連が腕節も碎けん計りに一生懸命にバチ／＼ヂャン／＼グワーン／＼叩合す上にヤアと澄透つた関の聲が交るのでから夫れは夫れは實に騒々しいものだ、斯くて愈部落はづれまで到着するや小供等は携へ來つた棒切れ丈けを其所に投

り棄て、又一トしきりワアと聲を擧げて逃げ戻るのだが之を凡ろ一週間位繼續して毎日勵行して行く、一週間の最終日には板片れ、破れ鍋、ブリツキ罐、石油罐等一切を投げ捨て、歸つて來て茲に全くコロイウダシは終結を告げるのだ。我々子供連は別に六ヶ敷い考へ等もなく只各自の父母祖父母等の吃付けに従つて之を行つて居たのだが我々の父母祖父母等は此の子供等が板切れ又は石油罐等を叩く事に依つて恐るべき疫病虎列刺を部落から追出し得ると信じて居たのだから頗る滑稽千萬な話である、石油罐を叩いて虎列刺を追出すと出来る筈とすれば眞鍮の金盃でも叩いたらチブスでもペストでも追出すには譯無い筈だ。此の時代は赤痢もアカハラと稱して随分酷く恐かつたものだが我々はコロイウダシの序にアカハラまで一緒に追出した積りで濟し込んで居た、そして今になつても忘れないが此時分石油罐の叩き方が足りなかつたのかして部落中にア

か、ハ、ラに糶つて死んだ子供が出来た、其の葬式が僕の木戸を通る時に僕は何氣なく其の行列を見やうと木戸口に驅出して行つた、すると七次郎と呼ぶ伯父さんが慌たしく追絶つて柿の葉を摘んで僕の臍に當てがい「確り押へて居れ」と耳元で低い聲ではあるが如何にも力強く且つ大事さうに囁いて片手では自分の臍にも柿の葉を當てがつて確かと押へて居たのを覺へてゐる

察するに七次郎伯父さんはアカハラは臍から這入つて来るものと信じてゐたのらしい

(大正三年五月)

牧 曉 村

埒もなく夏の休みをふる郷に草とりくらすもぐらよいで來
夕暮を蟬せつくと鳴きひひかしに雲たなびきて蚊は一ツ來る

氣 ま ぐ れ 旅

上

之と言つて掴まへる様な理由は無いけれど何だか嫌な嫌な氣持がしてならぬい、こんな氣持になつたが最後どうしてもヂツとして居られる性分ぢやない、何所でも構はないから氣まぐれに駆け歩いて見やうと目的もなく下宿を飛出した、イラ立つて氣狂の様な僕を乗せた汽車は今し度東市來は湯之元驛に停車した、僕は見るともなしに色んな包物だの鞆だの行李だのと小荷物をぶら下げて降りて行く旅客の後姿を見送つて居たが急に扇を開けるやブラットフォームに飛降りた、ろうして取締の警官に

「宿屋は空いて居ませうか」

と聞いて

「近頃一向客が無い様ですから大丈夫空いて居ますよ」

と確めるや僕は直ちに列車内に取つて返し網棚から中折帽と洋傘を取るが早いか再びプラットフォームに降立つた、殆ど全時に列車はビューッと揺出して行つた。

モウ彼是入時だらう、全く日は暮れて驛前の茶店や川向ひの温泉場はあかしくと灯が點いて夜の景色は全く整つて居る、停車場から右に折れて小學校の側から小橋に差蒐ると足下の川面に螢が一ツ如何にも落着た調子でボカー／＼と流れを下つてゐる、此の物靜かな田園の夕景色は流石にいら立つた心も和けて何だか自分で自分の心が可笑しい様にもなつて来るが可笑しかつても悲しかつても仕方がないのだ、僕は其儘刈入れ時近い麥畑の間を縫ふて國道筋の有川

旅館に靴を脱いで懸て奥の小意氣な離れ座敷に案内された

扱て飯は食べてゐるので何も腹に不足は無いが何より咽喉が乾いて苦しい、何と言つても今日は朝からあてもなく無茶苦茶に歩き廻つたのだもの

「御飯は要らないからサイダーを持つて来い」

僕は立續けにキューツと持て来たサイダーを飲み干すと其儘フイと温泉に足を向けた、おスキと言ふ女中が

「御案内しませう」

と後から附いて来る、之も餘計な御世話だとは思つたものゝ格別邪魔にもならないから上等男湯と書いた入口の所で引張つて行つて「御苦勞」と少しは優しく言つて僕は只一人浴槽に五体を浸して始めてのび／＼とした氣になつた、一体此の日の出温泉は浴室も泉質も綺麗であるが第一温度が低い、第二に叩きと

槽椽どの高さが足りない、夫れから浴室が少し狭いのが欠点で掛り水の如きも
 頗る珍奇な水溜を設けてあるが實用の点から云へば極めて馬鹿氣た不便な御飾
 りに過ぎない

中

僕は湯の中に衝立つて頭から御湯を續けざまに被つた、無暗矢鱈に引被つた
 、只柄杓丈けぢや物足りないので、傍の手桶(出火の際に供ふる爲めのものら
 しい)を以てザア／＼やつた、斯くて心持グタリとなつて宿に歸つたが今度は
 別な女中かやつて来て神妙に片手を突き

「御茶持つて來まッしよか」

と返事を待つて居る、來まッしよは如何にも耳新しく響いたがそんな事は何う

でもよい

「一々聞かないでも持つて來なければ早く持つて來んか……序に菓子も……」
 女中は頗る變な顔をして暫し僕を見上げて呆れ果てゝゐたがやがて思付いた様
 に「マァー」と言殘して出て行つた、マァーとは支那語で馬鹿と言ふ意に當る、
 マサカ此の女支那語を心得て居て僕を馬鹿と嘲弄するのでもあるまいから其儘
 納まり返つて居ると程なく「まッしよ」は御茶どカステラを運んで來た

「オイ君の名前は何か」

女中暫しモソ／＼して居たが何やら決心したらしい身振りで

「梅……」

「フム梅どんか、生れは何所だい」

「牛深です」

「牛深かい、そして何日来た？」

「一昨日来ました許り」

「一昨日？」

牛深と言ひ一昨日と言ひ何れも意外な事計りだ、牛深と言へば女で名高い天草の本城だ、世界中を小跨にかけて雄飛しつゝある娘子軍の大部分は所謂天草女だと聞いて居る、お梅どんに此の意氣あるや否やは我れ之を知らずだが兎に角海を越へて一寸湯之元まで近征を試みて来たのだらう、然し断つて置くが天草女の聲と名に似ず御顔は大分出来が拙い様だ、此の女仕事の暇には部屋に来てセツセと網を結いてゐるが其手際が仲々旨い

翌日は曩程朝鮮より歸來の叔父石川與一郎氏を自宅に訪問した、小學校時代に

逢つたさう殆ど十七八年も逢はないので叔母様などは全く見忘れて居られる、叔父様は如何にも今昔の感に堪へない様な思入れでシゲく〜と僕の身体を見入つて

「フム太どなつたね、フムもう廿七になつたか……俺れア汝が學校から泣いて歸るのを見てから逢はんのぢやからねー」

と昔の思出を辿つて居られる、泣く所を視られたのは何だか氣まりが悪いが夫れでも善く年上の誰彼と喧嘩をやつて勝つたり敗けたりして居たから泣いたのは無理もない事だ

下

色色と御馳走になり叔父さんの宅から歸つたのは彼は二時近い頃であつた、

晝寝でもやらうかとゴロリとなつて見たが考へて見れば頗る馬鹿くしい、馬鹿らしいと氣が注いたら猶豫も何もない、直ぐ跳ね起きるや女中を呼ぶ、勘定を命ずる、洋服を着るうして勘定を濟ませて旅館を出たが目下停車場温泉場間に三間巾の直通路路工事中でろのドコビールを傳つてぢきに停車場に行ける、工事費は何の位かと驛長及警官を捕へて聞てもサア善く知りませんとは呑氣なものだ

斯して二時卅八分の上りで歸麿の途に上つたが列車は何時しか伊集院驛に停まつた、南薩線伊作、加世田間營業開始の日で何処もなく混み合つてゐる様にもあるがフト電氣會社の美座君が眼に注いたので手招きで召し寄せて居ると之は又意外、南券に人ありと知られたる吉哉君豪う取濟ましてツーと這入つて来た、そして心持反身になつて一寸車中を見廻したる其の呼吸は何だか十八番の

劍舞でもやり出しさうな思入れだ、美座君は「マア之れア面白い所で出會したね」と頻りに取繕つてゐるが御當人は中央公論、吉哉君は新小説の新年號と二人ながら打揃つて雑誌を持つてゐる所なんか小小變な様な氣がした

吉哉は美人なりとは既に動かすべからざる定評だが然し僕をして言はしむればどうも口元から鼻、眼、頬全体にかけて何所かに材料が足りない所があつて夫れを造物主が無理をして美人に仕上げた様な感トがしてならない、僕がこんな事を考へて居るとは夢にだに御存トない吉哉君は妙に濟まし込んで窮屈な顔をしてゐる、如何にも周圍が徒然でならないので僕は三尺位の細紐を取出して御慰みに天勝裸足と云ふ奇術を一番御高覽に供した譯だ、此の相捧になつた吉哉の妹、みとも見へる御嬢さんは鳩の様な目を瞞つて驚き且つ呆れて仕舞つた、ドウセ吉哉先生黙つちや居まいと思つて居る所に

「モウ一遍」

どの御所望だ、三四遍やつた後で今度は

「教へろ」

と来た、僕は唯々諾々仰せを畏みて親しく御傳授申上げたるが吉公頗る御機嫌の態で

「ア、嬉しい、藝が一ツ増へた」

と頗る悦に入つて御座る、さうこうする中に列車は武驛に着いたので僕は此所で失敬した、武から鹿兒島驛迄の間であつたか鹿兒島驛に降りた其先さであつたか知らないが吉哉君、美座君に僕を評して

「小供らしい罪のない人だ」

とは善く言つたり

(大正三年五月十三日)

神代の飛行翼

上

往時は勿論の事ツイ二十世紀の初頭の頃にさへ知名の學者にして人類が空を飛行する事は、到底痴人の夢たるに過ぎないと言へるも地からも相手になかつたものであるが、然るに爾來僅に十年の中に空中飛行の理想は立派に實現されて飛行の距離、高度、時間、積量に於て驚くべき記録を作り、而も尙日に月に驚くべき進歩發達を示しつゝあるとは讀者諸君の熟知せらるる所である

抑も人類が空を飛び度と實際に機械を製作して實驗を試みたのは最近十七世紀に入つてからの事であるが然しながら空を飛び度いと言ふ希望を持つて居たのは實に人類の創始、鴻荒の時代からの事で現に我國にありては神代の昔素盞

鳴尊が風に乗つて唐の國に渡り麥の種を御持歸りになつたと傳はつてゐる位である、又西洋にありては空中飛行の傳説は有名なる希臘神話の中に最も詳しく傳はつて居るが神代の飛行思想なるものが何んなものであつたかを知るに最も適はしい題材だと思ふから左に其要點だけを摘記するにしよう

大古アゼンス王エシユースの頭一人の工匠が居た、名をデタラスと言つて木材金石の類を以て色々な物を作るに非凡の技倆を有し、蝶番を用ひて戸を開閉し、柱を立て屋根を支ふると考案し、全然家屋の構造を改めさせた、又鉛垂を吊るして物の傾斜を測るとを始め螺錐を造りて孔を穿つとや、帆柱を立て繩を以て帆を上下すると等を發明した、夫れから更に若きエシユース王の爲め新に壯嚴無比なる回殿を造り、府市の中央高地にあるアシーナの神殿を改造する等の大工事に成功して其偉名を遠近に轟かした

扱て茲にデタラスにバアデックスと言へる一人の甥があつた、幼時より叔父の徒弟となつて工匠の技術を習つたが怪來の器用者として技工共に叔父のデタラスを凌駕するに至り魚の背骨を拾つては夫れに似せて鋸を作りコンパスを發明し轆轤を案出し鑿を創造する等斯る奇妙の發明は數へ難い程である、之を見たるデタラスは

「彼れ若し斯の如くにして行かんにはるの業はるかに我に勝りて彼の父は萬代に傳はり我が名は今にも忘れられん」

と大に嫉妬の念禁する能はず遂に或朝アシーナ神殿の修繕工事に従事中デタラスはバアデックスが登り行ける崖上に吊るせる足臺を丁と只一撃に切放つて仕舞つた、不幸なるバアデックスは足臺諸共アハヤ數十丈の崖下に粉な微塵となりんとする一刹那、アシーナの女神はバアデックスを變トて一羽の鵲鳩と化し

て下さつた、鷓鴣は其儘飛んで彼方の丘に去り己が好める林の中や、森や、牧場や、河邊の叢のはどりにろの生を送つて居ると言ふ、

扱て此の大椿事を聞いたアゼンスの市民は大にデタラスの卑怯の行ひを惡みて激すると甚だしく直ちに之を捕へて死刑に處せんとしたが、又想へば彼等の家屋什器を始めデタラスの爲に便利を得たるとも限りないので流石に之を殺すに忍びず遂にアゼンスから永久に追放する事に決した、事茲に至つては致し方がない、デタラスは己が諸道具と愛兒イカラスを伴ひて遠島に航する船に乗組み悄然として郷里アゼンスの都を後にしたのである

中

惡行の爲め郷國アゼンスを永久に追放されたる稀代の工匠デタラス及一子イ

カラスとを乗せたる船は途中幾多の辛酸を経て遂にクリートの本島に到着したがデタラス親子は其處に上陸して名乗りを揚げた、ドウセ惡智慧に長けたるデタラスの事だから追放せられた事實を語る筈がない、一寸思ひ立つて世界漫遊の途中である位のデタラメは言つたに違ひない、時のクリート王はマイノスと呼び智に秀で勇に秀で謀に秀で又治に秀で聲名旭日の昇るが如き時代であつた、ろしてデタラスの妙技は夙に海を越へてクリート島にも傳はつて居たのでマイノス大王はデタラス父子に王宮の一室を興へて之に住まはせ約するに十分に働いて呉れたら重き名譽と厚き恩賞を興ふる事を以てした

追放の工匠デタラスは茲に於て大に助かつた譯だ、ろして腕に任せてマイノス大王の爲めに驚くべき宮殿を造營した、庭園の黄金立像は皆舌を動かして言語を發したと傳へられてゐる、夫れから其頃附近の山中にミノテオルとて頭は

野牛で體は人間の形をした怪物が棲んで居てその最も来るを好まざる所に必ず現はれ來つて男女童兒の差別なく日毎々々に取食ふので全クリート島は之が爲めに震駭して居た、デタラスは大王の請に依り有名なる迷宮を建造して怪物ミノテオルを其中に誘き入れ以て怪物を終生屋内に封じ詰り時々敵の捕虜を投げて養つて居た、其他之に類した偉業は數限りもなく追放の名工デタラスは此處にも非凡の技能を現はし従つてマイノス大王の御覺も至極目出度く親子の者は異域ながら先づ安樂に得意の月日を至城の一隅に送る身となつた。

然るにデタラスは少し風向がよくなつたかと思ふと直に圖に乗つて増長し出した、そして程なく彼は再び許し難き悪行を犯すに至つたのである、茲に於て大王マイノスは激怒した、其場に首を刎ねらるべき所をマイノスは尙其宮殿を造營せしめんとの下心があつたので暫らく死罪を免れ其代り報酬なくして勞役

にコキ使はれる哀な身の上となり變つた、マイノス大王は令を下して市府の外門を鎖し港にも兵を遣はして警戒を嚴かにしデタラス父子は全く幽囚の身となつて如何に焦つたとして到底逃れ出づべき望みは何處にもないのである。デタラスは其の行狀ころ不良行爲が多かつたが其の技能の非凡なる寔に千古の名工と仰がるゝに十分であつた、一度幽囚の身となるや彼はひたすらにその身の自由を得る事に日夜思案を碎ひて居た、晝間は王の爲めに宮城の設計をなすど見せかけ夜に入れば密かに一室に籠り一臺の燭火の下に専心力鑿を揮つて苦心の幾夜をか過したのである、マイノス大王の警戒は陸に海に一點の隙もない、名工デタラス！彼れ果して何の名案を以て其の幽囚から脱出せんとするのだらう？

「マイノス大王は陸と海とは取締ることが出来やうが大空までも支配する事は出来まい、己れは空を行つて見せる！」

とは工匠デタラスの腦中に閃いた信念であつた、彼は夜となく晝となく心を碎き思ひを惱まし先づ大小の羽毛を蒐めて糸で括り臘で貼り革紐を着けて刻苦慘憺數十日にして遂に彼と一子イカラスの爲めに二對の丈夫なる飛行翼を完成するに至つた、其處で彼は闇深き三更窓に庭外に立出で、飛行翼の試験を試みしに思ふ様な飛翔は出来なかつたが其結果は極めて有望の成績を示した、彼は試験の成績を見て直ちに羽毛を増し革紐を加へたりなどして多少の改造を施し再び月光の夜に乗つて試験を行つたが今回は成績極めて良好で餘程自由に飛べる様になつた、彼は一子イカラスにも翼を装せて先づ王宮の屋根に舞上り、更に城門の上を翱翔して遂に彼方の丘の上まで飛んで行き夜の明け方に戻つて來

て首尾能く第一回の試乗を終つたが、夫より父子の者は夜毎に練習を續け行く程に一ヶ月の終りには空中を飛ぶと地上を歩くよりも容易となり、高き山を越へ廣き川を横ぎると鳥よりも自由なるに至つた

デタラス父子は茲に意を決し一對の飛行翼に身を任せ白雲去來する大空を突破して幽囚の地クリート島脱出の大冒險を執行することになつた、デタラスは一子イカラスに飛行翼を取付けてやりながら

「空の中程を飛ばなければいけないのだよ、低ければ霧に邪魔をされ、高ければ日輪の熱氣で翼の臘が溶けて仕舞ふであらう」

と茲に父子相擁して首途の接吻をしながら羽ばたき勇ましく二個の大鵬は王城の草木に別れを告げて天空高く舞上つて行つた、彼等は左にサモスとデロスの島々を眺め右にレピントウス島を見て西へ西へと進んだが目指すは百里の彼

方なる伊太利のシシリ島である、デタラスは折々振返つては子供の翼の使ひ
ぶりを注意し或は後れぬ様に勵ましなせして折からの東風に送られつゝ漫々た
る地中海の波上を相前後して羽はたき勇ましく翔り行つた

斯くて漸く晝近くなつて行くと次第に暑さが加はるのでデタラスは

「翼をば常に冷せ、高く飛んぢやいけない」

と戒めしもイカラスは頭上の白雲を仰ぎでは遂に好奇に驅られ父の教訓も打忘
れ

「日神の金車を驅る天馬を一目なりと見たいもの」

と大膽にも一人翼を鼓して上へ上へと翔り行き遂に雲漢高く昇り詰めたが此時
日光の爲め翼の臘は何時しかとけ去つて飛翔の力を失ひ哀れやイカラスは悲し
げに父の名を呼びながら真逆様に洋中深く姿を没し去つた、此の大慘事を目の

前に見たる父デタラスの悲嘆は譬ふるに物もない、彼は只一人悄然としてシシ
リ島に到着したか直ちにアポローの爲めに神殿を建て、その翼を捧げ斯くて
再び彼が鬼工を世に現すとがなかつた、そしてイカラスの沈みし海は今に其名
をイカリア海と呼んで此奇しき一場の悲劇を偲ばせてゐると言ふ

(大正三年六月)

牧 曉村

あの汚れし襦衣にはわれと幾年をわが肌に住しなつかしき襦衣
六ヶ敷生活話を避けながら飲む焼酎に酔ひもするかな
實をとると攀ぢのぼりたる柿の上空を見つゝむるわれなりしかな
不孝者母の背叩きまつらんとふと思ひけり酔のかなしや

妙な耻

日露戦争當時の暑中休暇中、僕は村の或禪宗の寺に一月近く滞在してゐた事がある、夫は寺の住職(現南州寺住職伊東慧總師)が騎兵か何か召されて出征して差當り之に代る人がなく已むを得ず空寺となつて荒れ果るに任せてわたの物を物數奇な僕が進んで寺の留守番をしやうと米味噌を持込んで只一人ガラソとした空寺に這入り込んだのだ、寺は別に人里離れてゐる譯でもなく又さして大きい寺でもないが松の茂つた砂山一ツ越ゆれば直海邊に出られて潮を浴びるなり、貝を漁るなり、何でも自由氣儘な所であつたが近所は草深き田舎の事とて然るべき話相手もなく毎日一人では頗る退屈に苦しめられて實は閉口して居た、其處で或日の事近所に住まつて至極實直なる擅徒たる吉と言ふ爺に朝夕

の鐘の叩き方を習つて退屈凌ぎに叩く事にした、鐘は警察の半鐘と變つた所はない様だ、之を木槌でガン／＼と叩く時の勇ましさは叩いて見ない人には分るまいが五体が振ひ立つ位に仲々壯快なものである、僕は爺が「餘り力を入れて叩くと破れるかも知れない」と警めたにも拘らず木槌に渾身の力を込めて叩き散らした、夕方の鐘即ち晚鐘だけは丁度日の入る頃に調子善く叩いてゐたが朝の鐘即ち曉鐘になると頗る怪しいものだつた、時には十時十一時頃漸く起上つて叩く様な事もあつた、然し僕は十一時でも十二時でも兎に角起上つた時を以て、ガン／＼やつてゐて時刻等を氣にする様などはチツトもなかつた、其中二三里離れた村の従弟がやつて来て僕と一緒に留守役を勤めるとになつたが間もなく茲に面白い事件が持上つて來た

或日の朝九時頃平常になく早く起きて鐘も叩き終り扱て二人して籠の下を焚付けて朝飯の用意をしてゐると三十幾らとも見へる八字髯の田舎染た紳士と同年輩位の座頭と二人玄關に立つて事々しく案内を乞ふた、僕は内心

「面倒臭い野郎だな」

と思ひながら炊事の方は従弟に任せ兎も角二人を座敷に招つて對面致したが何よりも先づ其の挨拶の丁寧などには面喰つて仕舞つた、夫から日本家庭の習慣として御茶を出して先づ要があるなら承らうと言ふ様な面をして待構へてゐると座頭の先生徐に茶を啜り終つて「観音様がドウの」と言ふ様な話をやり出した、僕は観音様の佛様のと言ふとは善く知らない、變なと言ふ連中だと思ひながらハア／＼と氣のない返事をして居ると夫れでも二人は十分に喋つた上、更に一段言葉を改めて

「和尚様は何時鹿兒島から御出んしたか」と切出した

讀めた！二人は僕は坊子だと思ひ込んでゐるのだ、最前からの話が可笑しいのも無理はない、吹出し度いのを抑へて

「僕は坊子ぢやない、橋口の淬だ」

と名乗りを上げると二人は只もう呆氣に取られて啞然たる少時、

「世話人から何でも知らせがないので不思議とは思つて居ましたが毎日鐘が鳴りますので坊様が御出なつたかと思つて居ました」

と所在なげに二人の忠實なる信徒は妙な耻をかい其儘辭し去つたが後で二人は近隣の誰彼に向つて

「橋口殿の稚兒サアが飯焚を一人連れて寺の留守番に来て御座つた」

と話したさうな、僕を坊子と感違ひした二人は更に從弟を飯焚きと感違ひして歸つたのだ
(大正三年七月)

牧 曉村

下宿屋の飯を十年も食ひぬれば飽きたれど本を讀まるとがよし
とりあぐれば饑えたる汗のアンと匂ひぐたくなれる襦衣の悲み
花街にさまよひ來り潮上る溝にもはまる此の醉興人よ

小川 蘆葉

嫉ましさわつさ炎か皮一重しのびせむるを淺ましと云ふ
落日の前樹々よ家並よ行く人の姿は黃に染りてありき

露 營 記

「一晩で善いから露營して見たら」

とは今回の機動演習に從軍する前からの素志であつたが幸にして旅團對抗演習も明日までと言ふ晩即ち十一月十日夜此の素志を貫徹する事が出來て愉快に堪へない、然し此の愉快を獲得するまでには随分と苦心もし又難儀もした

此日北軍は岡澤第十一旅團長指揮の下に都城町の西方約二里の地點にある日、隅國境附近贈嶽郡財部村高之牟禮岡北麓に據れる南軍(森卅六旅團長指揮)を攻撃し午前十一時前後に非常の大激戦を交へたが其結果北軍は多大の損害を蒙つて撃退せられ一方南軍は國分方面より來援せる二千餘の歩兵を加へたれば

北軍は止むなく旗を捲いて都城の北東約三里を隔つる北諸縣郡高城村まで總計五里餘の退却を餘儀なくせられた、北軍退くと見るや南軍は直ちに之を追撃して其の左翼は高木、出口より右は遙かに山之口停車場南方花木附近に到着した、北軍は高木川に架したる國道筋高櫻橋を挟んで櫻木南端の地帯に據り健氣にも南軍の渡橋を拒止せんとして居る、斯くと見たる南軍司令官森少將は自ら戦線に立ちて軍を指揮して野砲隊援護の下に苦もなく敵前の渡橋を強行し直ちに櫻木、寶光一帶の敵兵を撃攘したが時漸く薄暮に際し戦闘に便ならず茲に南軍は東嶽川を挟んで遙か對岸高城の北軍と相對峙するととなつた、言ふ迄もなく兩軍は互に敵前の警戒嚴重に部隊は田の中畑の中、或は森の蔭に露營して一夜を明す事となつた、此夜統監部は高城に宿營し、從軍記者團の宿舎は同地の刀圭家野崎彌八郎氏宅に用意が出来てゐたが記者は夕食丈けを御馳走になつて

午後八時一行と別れ直ちに南軍の陣地に向つて進發した、一体高城から櫻木、寶光の兩軍陣地に行くには少くとも半里の國道を歩き且つ何うしても南北兩軍の前哨線を通過しなければならぬ、殊に舊曆廿三日の頃とて月は十二時にならぬは出ない、所謂眞の闇夜を星明りに辿り辿つて部落を出で物の二三町とも行かない中に路傍の暗闇から低いながら底力のある聲で「誰かッ!」と誰何されて思はずギョツとなつた、見れば何時の間にか着劍の兵士兩三名闇にも白き銃劍を記者の胸に擬してツイ鼻先きに立塞がつて居る、何も知らずに通り蒐つてこんな目に遭つたら大方腰でも抜かす所であるが其處は豫め覺悟の前だ

「從軍記者!」

と軽く言ひ抜けて四五十間も行くど又

「誰かッ！」

と来た、誰何は元より豫期してゐるのだけれども眞暗闇の中から突然

「誰かッ！」

とやられると思はずギョッとする、ろして、ッ、ッ、と瞳を据へて前を見れば皓々たる銃剣の穂先が二三本、鼻先にキラ／＼してゐる、殺される心配は萬々無いのだけれども薄氣味の悪い事夥しい、漸く北軍の歩哨線を通り抜けて更に南軍の歩哨線に差蒐るや相變らず「誰かッ」をやられる此方ぢや又「從軍記者」で押通して行つたが路の兩側に當る田圃や畑の中では兵士が夜に乗つて陣地を構成するスコツアの土を掘る音がザク／＼と闇を衝いて聞こへて来る、之とて仲々いい氣持の音ぢやない

二

最後に東嶽橋の所で南軍の小哨約一小隊に取圍まれたが相變らず「從軍記者」を繰返して通して貰つた、或は遠く或は近くシツ切りなしに秋の夜の寂かな闇を破つて銃聲が聞えるのは言ふ迄もなく兩軍斥候の衝突である、斯くて櫻木の南軍混成旅團司令部に辿り着いたが此處には森少將、副官上原大尉、同有田中尉が燈下に地圖を按つて鳩首對戰の謀議に忙はしい様子である、門口は種々の用務を帯びた將校士卒の出入が絶へないが其間に味方の將校斥候も次ぎ々々に歸つて来て

「穂満坊の西端田圃の所に約一個大隊、七日市の南部に一個大隊、其の西に一個中隊、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、」

ど夫々詳細なる報告がある、上等をスツカリ寄集めて愈々旅團長は攻撃か或は防禦かを決心し夫々軍の部署を定めるのだが其中体格で言ば回向院に押出して幕の内は外れぬと言ふ四十五聯隊副官北村大尉と同第二大隊副官池田中尉が懐中電燈をピカ／＼消したり照したり恰も小供の様な事をしてやつて来た、池田中尉は

「今夜田圃の中のシク／＼した所に露營だ」

と言つて笑つて居る、うして記者を捕へて

「一体今頃此邊に迂路々々何をして居るか、此邊に宿が無ければ高木に行つて見ろ、好か所が二三軒あるから」

と言ふ話ぢや

「イーンニヤ、好か所は要らん、今夜露營をして見度いのだ」

之を聞いた池田中尉は即座に

「ろんなら僕の大隊に來給へ、此の國道筋を南西に約二百米突行くと部落外れの所に出る、夫れを右に折れると左手の田圃の中に天幕がある、其處が僕の大隊だ、僕は少し用があるから君は一足先へ行つて居給へ」

と来た其處で教はつたまゝ行つて見ると成程數十と知れぬ大小の天幕が田の中にズラリと並でゐる、中では火を焚くと見へてドンヨリとした鈍い火光が天幕を透して漏れてゐる、燻る煙も灰白く光りを受けて其處等邊りに漂よつて何となく淋しい景色に見へる、濕氣の多い田の中をシク／＼歩いて

「四十五聯隊の第二大隊は何處ですか」

と聞いて廻つたが彼方だ此所だど一向要領を得ない、同ト所を何回どなく行つたり來たりしてモウ厭になつた、更に行當つた天幕に頭を突込んで

「此處は何大隊な」
と聞く中から意外にも

「ヤア、橋口君ぢやないですか、マア這入り給へサ」

と言ふ聲がする、見れば六十四聯隊附の三宅中尉(俊雄だ)、三宅君とは今年の正月沖繩演習に一緒に行つて熟知の間柄だ、夫れでも六十四聯隊に迷い込んで仕舞たなど思ひながら免れ角中に這入つて藁の上に胡座をかいた、第三大隊長伊東小佐(益雄)も一緒に互に水筒の中から焼酎を出して飲み合ひ且つ話合つたが伊東少佐は体量二十四五貫もかゝる大兵で北村大尉よりモット上を行つて三役格だ、乗馬が潰れはしないかど心配の爲續けとは聞いて人間決して肥る可からずの感を深ふせざるを得ない

三

話に實が入つて物の四五十分も座り込んで居たが考へて見ればこう悠りして居られぬ、今度は伊東少佐、三宅尉兩人からよく四十五聯隊の位置を聞いて此處を立出でたが扱て足一步天幕を出づれば文目も別ぬ眞の闇で方角も何も薩張り判らない、止むなく行當つた歩哨らしい着剣の兵士に「四十五は何處だ」と聞く

「サアよく知りませんが兎に角あつちです」

と其のあつちと言ふ指の先を見れば大分方角が違ふ、成程方角違ひのあつちに相違ない、此の近邊ならこれ丈け聞いて判らない筈はない、其處で記者は茲に愈あつちに行く決心して溝の淵を洋傘を頼つて手探り足探り約十町位も進んだと思ふ頃提灯をぶら下げた兵士に出會した、四拾五は何處だと聞けば

「サア何處か知りませんが何でもあつちです」

と更に々々に方角違ひの方向を教へて呉れる、一体何處まで行つたらいいんだ
い！と言ひ度くなる、兎に角モウ一遍旅團司令部に行つて見なくちや駄目だど
諦めて夫れから國道筋と思ふ方向に足を向けた、其の道の悪い事又頗る妙で何
度ドブの中に踏み込んだやら滑つたやら、ろして鼻をつまんでも分らない様
な闇の中を森に入り野を抜け無茶苦茶にやつて行くと漸くにして或る神社らし
い所に出た、之を鳥居の方に行けば屹度何處かの路に出られると元氣づいて二
三間行くか行かない中に突然一種異様の毛の生へた偉大なる怪物に突當つた、
冷りと思はず總身の毛は慄立つて頭から冷水を浴びせられた如足も手も凍んで
仕舞つたが漸く之が軍馬だと分つてホット一呼吸、見れば外に三頭五頭十頭
頻りにムシャ／＼餌を食べてゐる、こんな目に遭つてヤツトの事で再び南軍の
旅團司令部に辿り着き今度は前哨大隊の任務を有する第三大隊に行く事にして

其の路筋を聞いたが何でも之れから十町位東の寶方と言ふ部落にあるらしい
、實を言へばモウ大分疲れて歩くのは厭だけれど其處は又持前の瘦我慢が飛出
して相變らずドブに踏込むやら滑るやらしてテク／＼やつて行く中に何時しか
森を出て一寸した野原に出た、此時漸く東の低い山の上から二十三日の弦月が
ニユーツと顔を出して呉れた、甚だ不充分的な光りながら餘程歩きよいので聊か
元氣づき遂に此の野を踏切つて更に眞ツ暗な森に入ると突然直耳元で

「誰れかッ！」

と此夜最終の誰何を受けた、もう誰何なんか一寸も豫期して居なかつたのと明
るい所から急に暗い所に這入つて少々薄氣味悪く思つて居たのとの二理由の爲
めに今度のは大分ドキンと應へたが

「從軍記者」

と例の如く無事に通り抜けて寶光に入り漸く第三大隊の露營地に達したが時に丁度十二時が二十分前、宿舎を出發以來殆ど四時間を經過して居る、直ぐ大隊本部の天幕にモグリ込んだが此處には大隊長松田少佐、副官土橋中尉、大場三等軍醫等が中に炭火を圍んで藁の上に寝たり起きたりして絶間なく比所彼所に聞ゆる銃聲に聞耳を立てて居る

四

記者は先づ順序として露營地の位置現狀等を説明するを至當と信ずる、大隊の位置は小哨其他地形に依り一ヶ所には纏まつて居ないが本部の位置は寶光部落東端に近き畑の中に定められ敵に面する北方は一寸した林に遮られて見へない様になつてゐる、此處から東方千五百米突の十字路の所は味方に取りても亦

敵に取りても極めて重要な地點なので特に川内少尉の一個少隊を派して我れに於いて占領して居た、此處等一帶は東嶽川の南岸に沿ひ急に一段高くなつた高臺になつて居て攻守共に要害の地である、次に露營地の現狀を説明すると畑の中には大小の天幕を幾十となく張つてあるが其の廣いのも僅に七八疊位のものだ、天井なども無論我々をして直立せしめない高さで何時も腰は曲げた儘で如何にも窮屈だ、夫れから地面には藁を持つて来て二三寸の厚さに敷いてあるが此處へ大隊長でも中隊長でも軍曹でも二等卒でも皆平等に武装の儘ゴロリと休むのである、犬や馬、牛等の家畜だつてこんな粗末な時は持たないと思ふ、夜分は大分冷るので天幕の中に直徑二尺位の穴を堀つて炭火を起してある、之も木炭がある時はよいが薪でも焚く場合は天幕内は煙で一杯になり殆ど眼も明けられぬ間に一夜を明すことになるのだ、又眼が覺めてゐる中は誰も火の中

に足でも突込む人は居ないが疲れが出てグタリと寝入つて仕舞へば知らず知らず火の中に足を差込んで靴を焦す外套を焼く手足を火傷する等色々な事故が出来るさうだ、夫れから一番困るのは雨の時でも天幕が確かり斜面にちつともダレミなく張られて居る際は決して雨漏りの氣遣はないが少しダレンで居るとか天幕が古いかすると直ちにボタリくと漏つて来る、仕方がないから彼處、此處を突張つて之れを防ぐのだが何うしても効力がない時は非常手段として藁を冠つて一夜を踞み通す外はない、藁を冠ると言ふのは先づ兩手で一ト握り位の藁を揃へて其の穂の方を緊り括り締めるいつの下から頭を突込んで冠るのだが之れで大抵の雨は防げるさうだ、之を下は一兵卒より或場合には隊長、旅團長、師團長までが實行するのである、食事なんか之に準じて粗末を極むるは元より當然で、ヤレ布團が薄い飯が堅いのも愚にもつかぬ小言を吐す奴等

は之れを聞いて將に愧死すべきである、實を申せば記者なども時たま身の程も思はないで我が儘な言語振舞が往々にしてあり居つたが一度び露營の經驗を嘗めてからは決して碌でもない我儘は言はぬ事に極めた、記者は一同と炭火を圍んで斯様な話を聞かされて今更ながら軍人の困苦の一通りならぬに驚嘆しつゝ何時しか十一日を迎へて午前一時頃ともなれば連日の疲れが襲つて只一枚の外套にくるまつたまゝ犬も寝つかれない藁の上にゴロリとなつたが背中が寒かつたり足が冷たりして如何に疲れて居るとは言ひながら仲々十分二十分では寝入れなかつた

五

ものゝ二三分間もトロくと寝入つたかと思ふ頃突然周圍でザワ／＼騒ぐ氣

色に露營の夢は破られた、聞くともなしに耳に這入るのは松田少佐のあの明晰な且つ聊か調子の早い聲である

「大隊は之れから直ちに川内少尉の小哨を夜襲せる敵の歩兵約一個大隊を撃攘せんとす……」

時計は正に午前二時だ、此の深更に我が前哨は敵部隊の夜襲を喰つたのである、斯くと知つたる前哨大隊長松田少佐は即時命を發して警急集合を行ひ駆足を以て敵に向つたが其間殆ど一分も要らなかつた様に思はれる、一個大隊と言ふ兵がこんな迅速にこんな混雑なく而も眞夜中に結果が出来るものだらうかと記者は全く感心した、そして直ちに隊の後から尾いて驅出したが部落を出ると一面に廣々とした平野である、低く聳るに立單めた夜霧は廿三日の弦月の光りに照されて灰白く恰も一練の薄絹を張つた様、其間に一隊の將士が右に左に

行き交ふ有様は何と言つて形容したら好いだらう、將校の號令は清く澄み切つて秋の夜の静寂を破り、幾百と數知れぬ銃劍は皓々と月に輝いて勇ましくも亦物凄い、斯くて大隊は所定の地點に滞りなく散開を終へ且つ豫備隊等の配置が出来て愈敵と接戦に入らんとする頃審判官光井少佐が驅付けて彼我の状況に依り該十字路は南北兩軍より各一個小隊宛を出して今朝曉明まで相對峙せしむるとに定められたので大隊は一ト先つ露營地に引取るとになつた、そして再び天幕の中に這入つて炭火を圍んだがモウ彼は三時を過ぎてゐる、松田少佐は例の快濶な調子で

「何うです、仲々寝られんでせう」

なども夜襲を受けると兵は殆んど徹夜しなければならぬ話などを土橋副官や其他と語り合つて意氣昂然としてゐる、軍人の連中は何時も景氣が好いが記者は

背中から尻の邊にかけて何だか妙に濕り氣がついて頗る氣持が悪い、考へて見れば之は最前葉の上に寝た時に地上の水氣が葉を通し、外套を通し、背廣を通し、シャツを通して遂に記者の肌にあんだのだ、若し之れが田圃の中だつたらモット酷かつたらうと思ふ、愈以て軍人の勞苦を想はずには居られない、兎角する中に旅團司令部から命令があつた

「第三大隊は十一日午前五時までに〇〇に集合を終るべし」

即ち南軍旅團長は愈今朝を以て高城一帯に踏留まれる北軍を攻撃する決心をなし之を敵に覺られない様に夜明けまでに軍の配置をなし夜が明けると同時に直ちに攻撃を開始せんとするのだ、

此の命令を受け受したる第三大隊は松田少佐指揮の下に露立ち罩めて仄暗き十一日午前四時寶光の露營地を引拂ひ隊伍肅々霜を踏んで〇〇方面に向ひ急進した

記者は此日の戦況を報導する便宜上旅團司令部と行動を共にする必要があるの
で此所に居残り、寢不足と疲勞の爲めグタク／＼になつた身体を露營地跡の炭火
に暖めながら寒さを凌ぎつゝ旅團司令部一行の來着を待合すのであつた

(大正三年十一月)

小川 蘆葉

みだらなる唄うたふ子の唇に春の濁れる光ゆらげり
流れくるひやけき風も薄運の女が吐ける息に似たりや
銀色の魚おどろ出ぬわが膝の奇術師の持てる白きあみの上

牧 曉村

われ解せぬ母なりとても相共に焼酎飲めばなつかしやなも
夕暮にむかひ團扇に蚊を追へる母の姿を見ればいたまし

咽喉を切る記

一日の晩の事だ、僕は一寸要事があつたので聊かの雨を冒し長田町の叔母さんの宅に寄宿してゐる同村出身の七高生徒を尋ね序に尻を据へて長々と話込んで仕舞つた、話は色々の方面に亘つたがキチトホンの人物が観客と自由に會話が出来たら人間と寫眞の區別が出来なくなつて困るだらうとか或は人間の首を自由に取放す事が出来たら嘸便利だらう、雨降りの晩なんか

「オイ君！序に僕の散髪を頼むよ」

とグイと首丈引抜いて風呂敷か何かに包んで友達に渡される、又少々上氣せて頭でも痛む時なんか

「一寸私の頭を洗つて来て貰へませんか」

と自分の好きな御嬢さんにも誰にでも頼む事が出来る、一時に五六個も頼まれた時は大きな桶に一緒に投込んで二本の丸竹を揃へて中央を括りろいつを左右に押分けてX形にした奴で恰も芋を洗ふ様にしてサツサと洗ひ上げる、時々

「痛い〜、モウ少し御手柔かに頼むよ」

なんて言ふ頭もあるだらう、歸る途中なんかで取落したりして瘤でも拵へたら

「大事な頭を粗忽に取扱つて呉れては困る」

なんてユライ苦情などが出るだらう

こんな他愛もない話をして殆ど呼吸も切れる位に笑つた、そして饅頭や蜜柑などを御馳走になつて十時頃御暇したが此時何だか左の咽喉部が變だと思へる、

試みに耳下二寸位の所を外部から押して見ると極軽い且つ鈍い痛みではあるが兎も角異様の疼痛がある、然しこんな事は何時でも時々ある事だと深くも氣には留めず一夜明して二日の朝となつて見ると何うも變だ、唾を飲み込むさへ出来ない位の痛さと三十八度以上の高熱が何時の間にか僕の五体中に喰入つてゐる、然し瘦我慢なら誰でも来いと言へる(實は大きな聲ぢや言へないが)僕は辛うじて生卵子一個を啜り込んで先づ御近所の耳鼻咽喉専門平川君の所に驅込んだ、元より親友の間柄で何の遠慮も要らない、直手術椅子に腰掛けて厭な味のする薬を二三度咽喉の奥に塗り廻され散々イヂメられた揚句

「又歸りに来い」

と注意された

「ろんな六ヶ敷い病氣な」

どキョトンとしてゐると先生如何にも御醫者さんらしい句調で

「ウン、ヒョットすると二三日休まにゃいかん」

ホー、之れアいかん、もつと後を聞きながらたけれモウ八時半だ、社の方が急いで居るので其儘後も見ずに飛出した

扱て机に椅つてペンは握つたものゝ何だかフラ／＼して妙に身体が落着かない、ろれでも仕方がないから兎も角十二時前に無事第一期戦を終ふる事が出来た、行數が間違つてゐてイザ組方となつて五十も百も足りなかつたら何うするかとも思つて見たが仲々二度と算盤を取る氣分はない、晝食は申譯に牛乳で済まし扱て之から何うなるかと少々首を捻つてゐると大抵三時と相場が極つた寫眞版が今日は意外にも二時には出来て来た、之なん神の助けと早速第二期戦に移り少々無理やら何やら言つて三時には自分受持の仕事だけは片付けて仕舞つ

た、こんな時は何より頼みになるのは醫者だ醫者だ、早速平川君の所に行つて又厭な味の薬を塗けて貰つた、病名は腺窩性扁桃腺炎とか言ふので目今盛んに流行してゐるさうだが

「粥でも食べて静かに寝んだ方が善い」

と言ふ事だ、寝ちゃいかんと言はれた所で誰が起きとるものか、碌々注意も聞きとらずに下宿に歸るや直ちに取被つて呉れた、夜具布團は最近新調の花嫁何時でも来いと言ふ尤物、夫れに卅八九度の發熱でフラ／＼するのは好い氣持だ、瘦我慢ぢやない

斯くて三日となつたが何うも頭が上らない、四日となつてもさうだ、ろして病勢は日一日と險惡の徴候を呈して来る。終いには舌が動かなくなつて全く口が利けなくなつた、止むなく筆談で用は辨て居たが食物が咽喉を通らぬのには

頗る閉口した、然るに胃の腑は至つて健全で頻りに御茶でも善いから一杯送れど火の付く様な催促をやる、仕方がないから御茶を一口入れ痛さを我慢してグツと一呼吸に飲み込もうとしたが夫れは咽喉には通らないで逆に鼻孔から出て仕舞つた

こんな事情で僕は遂に前後三回平川君に咽喉の切開手術を受けた、殊に其の三度目の如きは随分深くメスを突き刺された、麻薬も何もかけないのだから随分痛からうと覺悟して居たが思つたよりか痛くなかつたのには張合ひが抜けた、斯くて十日頃になつて漸く人並に口が利ける様になつたが一生の中此の一週間計りを喋舌り損つたかと思ふと何だか惜しい様な氣もする

(大正三年十二月)

野球の回想

僕は野球に就て一ツの面白い逸話を持つて居る

時代も何も忘れてバツキリ記憶して居ないが今より約十年前の明治三十六七年頃と思へば大差ない、當時僕は本縣川内中學校に在學して居たが何時の間にか野球術を習ひ覺て遂に推されて全校の選手様と成りすました、今から考へると馬鹿々々しいと思ふが夫れでも當時は殆ど夢中になつて春夏秋冬何時も變らずグラウンドにてボールを手から離した事はなかつた、無論幾度となく對級試合に出戰して汗みどろになつたり泥まみれになつたりして随分と努め勵んだものである

或日例に依り對級試合が催されたが此時の相手は僕等より下級のチームであ

つた様に思ふ、ろして其の兵力も幾分僕等の方が勝つて勝敗は戦はざる前から定まつて居る様な形勢であつた、夫れにも拘らず相手方は健氣にも死力を盡して力戰して來たが元より實力上如何とも致し方ない、我軍は着々として敵を壓迫しつゝ順次回數を重ね漸く終結戰に近づいて來た

此の形勢を見て取つたる敵の聲援團は從來の彌次り方を一變して主として我軍の投手に向つて野次り立て百方之を彌次り倒さんと其の勢ひ頗る猛烈を極めて來た、當時僕は投手の任務を以て對戰して居たが大抵の野次には馴れ切つてゐるものゝ次第に惡罵的に變つて行く敵野次團の青面を見ると

「何だい！此の野郎」

と言ふ氣が起つて來る、一球は一球毎に惡罵嘲笑冷評等は甚だしくなつて來る流石の投手様も胸がムカ／＼して

「生意氣な野郎共」

と野次團と睨み合ひの姿であつたが此時本壘の斜左後方の寄宿舍内から盛んに悪罵冷評を連發する一團の野次連あるを發見した、話の順序上一寸寄宿舍の位置を説明して置くが寄宿舍は東西に長い平屋建となつて居て野球場の三壘及本壘の線は寄宿舍と平行になつて居た、そして此の兩線間の距離は僅々十間内外しか離れて居なかつたのでファール其他の外れ球が時々窓硝子を破つて仕様がなないので試合の時は寄宿舍の窓には一樣に荒竹で編んだ球避けが下げられ居つた、寄宿舍の野次團は此の窓の所から首丈け出して座つたまゝ窓際に倚つて盛んに野次つて居るのだ

僕は第一之れが氣に觸つたのだ、野次るなら野次る様に正々堂々グラウンドに出て来て野次つたら可いのに生意氣千萬にも寄宿舍の部屋に寝るべつて野次つ

「不謹慎な振舞だ」

て居る、失敬極まると認めたので僕は投球の際ボールを出した積りで一發の熱球を寄宿舍野次團に向つて投つたのである
球は不幸にして人体には中らなかつたが直隣の板壁に恰も百雷の一時に落つるが如き大音響と共に轟然として命中した、此の意外の投球には滿場何れも呆氣に取られて仕舞つたが中にも今迄窓から首丈け出して居た野次團は夫れこそ色を失つて何處へ逃げ去つたのか影も姿も見へなくなつて仕舞つた、敵の心膽を寒からしむると言ふのは全く之れだ、僕は一人で快哉を叫んで溜飲を下げて試合も首尾好く我軍の勝利を以て終結を告げたが後になつて僕は舎監室に呼出されて

「不謹慎な振舞だ」
と散々油を絞られた、現一中教諭平田佐八郎氏も當時舎監だつたと覺て居るが